

---

# TREASON PRINCESS

KUROKO A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TREASON PRINCESS

### 【Nコード】

N4735P

### 【作者名】

KUROKOA

### 【あらすじ】

国王が意識を失って二年の月日が流れた。王国はかつてない危機に立たされている。政務の全てを取り仕切る高位七貴族議会議長。奔走する重臣たちは、ひとつの答えを出した。

「我々は王家に忠誠を誓う忠実なる家臣なのです」

突然に動き出した元老院。

それは、眠りに着く国王に代わり実の姉でもある王女に戴冠を促すものだった。

苦悩の末にその意を受け入れる王女。  
全てはその時から始まった。

「もう誰も巻き込みたくない」

国王暗殺未遂の疑いを掛けられ王国を出奔する王女

「ただ、命を助けられた借りを返す」

祖国に命を狙われたギルドの戦士。

廃墟と化した教会で出会った二人がたどり着く答えとは……………

## 序章 王国の危機

今日も国王は目を覚まさない。

いつ終わるとも知れない深い眠りの中、王都は幾度も季節が駆け抜ける。

ユーリ・ソル・ドゥークス・セフィールが王座に就いて、早二年の月日が流れた。

父であり、先代国王アルゼンの急死により、若干二十一歳の若さでローレンス神殿の洗礼を受け戴冠式を終えたユーリ国王は、その聡明さと武勇により父王以上の名君となりうるだろうと国民からの高い支持をうけていた。

若き王も、その期待に答えるべく熱心に政務に取り組んでいた。

しかし、玉座に就いて半年が過ぎた頃から、徐々に体調の優れない日々が多くなってきた。

初めは、若き王ゆえに激務からくる心労だろうと、その兆候を臣下たちも軽視していた。

しばらく、政務から離れて静養すれば体調も回復するだろうと。

そして、その日を迎えてしまったのだ。

## 序章 王国の危機

「陛下！」

いつもの時間になっても政務室に現れない国王を気遣い、侍従長が寝室へと向かうと室内で国王が意識を失い倒れていたのだ。

原因は不明……。

王都でも指折りの医師たちは口を揃えてそう答える。

事実、どのような医療をもってしても国王は目覚めない。

玉座に王がない。

この事態に、国中の貴族たちは激震した。

早急に王宮に駆けつけて、ここぞとばかりに国王に対する見舞いの言葉を並べる者もいれば、虎視眈々とその様子を伺う者もいる。

先王の時代から、貴族たちは決して一枚岩ではなかった。

国内の有力貴族たちはこの好機をものにするべく、ありとあらゆる方法を用いて王宮に恩義を押し売ろうと企む。

そんな中であって、この混乱を押さえ込んだのが王国高位七貴族議会だった。

元々は、国内貴族の統率を目的に先々代の国王が作り上げた諮問機関に過ぎなかった。

しかし、ホーキン卿が議長職についてから急速に力を蓄えていったのだ。

上級貴族を完全に統括し、政治的な力を徐々に増し、現在では王国の最高機関である元老院ですら七貴族議会の意見を無視すること出来ない。

そして、この事態にホーキン卿の動きは素早く見事なものだった。

国内の政治を一手に引き受けて混乱を防ぎ、名だたる貴族たちの横暴を押さえつけ、他国からの国内干渉の排除に至るまで万事に抜かりはなかったのだ。

この功績から、国王に代わり執務をホーキン卿が代行することを元老院が承認したのだ。

そして、国王が倒れてから二年の月日が流れた。

## 序章 眠りの王

いつものように、王宮では女官たちが朝早くからきびきびと働き、王国の重臣たちが多くの資料を手に持ちながら会議室へと姿を消す。いつもと変わらない日常がそこには流れていた。

まるで、燃えるような勇ましい紅色をした絨毯の上を、ゆっくりと優雅な足取りで歩く人影。

年の頃は二十代半ば。

整った美しい顔立ちは、気品高く凜とした印象を受ける。

背中に掛かる、よく手入れがされた美しい金の髪は首もとで一つに結われている。

高価な白地の絹に、金銀の糸で縫い取りをした上着には金やプラチナで作られた装飾品が惜しげもなく飾られている。

濃紺のスポンは、相当に名の知れた職人の手で作られた一級品のものであることが一目で分かる見事な造りだ。

全てが、洗練された贅沢の極み。

「エディーンさま、おはようございます」

女官たちはその人の姿を認めると、頬を赤く染めながらその手を止めて恭しく頭を下げる。

「ええ、おはよう」

涼やかな口調。

鈴の音のような凜とした声だった。

爽やかな笑顔で答えるその人。

王女エディーネ・ロウ・ドゥークス・セフィールは、弟で現国王ユ  
ーリが療養する本宮に歩を進める。

## 序章 眠りの王

威厳というよりは、威圧に近い……巨大で重厚な木製の扉。

その前には勇壮な二人の衛兵が、まるで蠟人形のように一点を見つめたまま詰め所の前に立っている。

「少々お待ち下さいませ。ただいま侍女にお知らせいたします」

かしくまって、平伏した衛兵は踵を返すと扉を開いた。

扉の中には、小さな個室が設けてあり、その奥にもう一つ扉が設けてある。

この個室には、国王お傍付き女官のエルミダが控えている。

エルミダは、王宮でも一、二を競う古参で王宮の信頼も厚い女性だ。

もう、五十をとうに過ぎてはいるが、若い女官たちよりも動きが機敏で国王お傍付き女官に任じられるまでは女官長として王宮勤めの女官たちを取り仕切っていたつわものだった。

「どうぞこちらへエディーンさま」

小柄ながら横に大きく丈夫な体つきに、少し白髪の混じった髪は後頭部で結い上げている。

平伏している二人の衛兵の横を通り過ぎ、エルミダの後に続き国王

の寝室へと入っていく。

そこは、普段から贅沢品に目の慣れた貴族ですら感嘆のため息をつく、一般市民に至っては思考が止まりかねないほどに豪華なものだった。

室内に飾られた絵画や焼き物などは、一つで一般市民が一年は不自由なく生活できる程の高価な品ばかり。

北方の国で作られた繊細で高価な絨毯が敷かれ、四本の大理石製の支柱は、あらゆる神々が祝福する様をあらわした彫刻がなされた豪華な天蓋を支えている。

寝台の敷布は、国内でも最高級の絹が使われ、一国の王の寝室としてはこれ以上のものは無いだろう。

そこに、一人の青年が静かに目を閉じて横たわっている。

顔色は優れず、少し頬がこけている。

元々は美しい金の髪も今は輝きを失っている。

傍らに寄り添い、目元に掛かる髪を優しく払いながらその閉じられた目元を見つめる。

そこには、まるで蠟で作られた人形のように真っ白な肌と美しい顔立ちの国王が眠りに就いていた。

## 序章 眠りの王

徐々にやせ細る国王。

エディーネは、自分の無力さを呪わない日は無かった。

父王の急な死去にともない、まだ若い弟にこの国の全ての責務を背負わせる事となったあの日以来、エディーネも王女として精力的に活動してきた。

王に代わり、領主の争いに介入することも、市井で起こるあらゆる問題を解決することも、少しでも負担を減らせればと考え走り回った。

しかし、エディーネの想像以上に国王に襲い掛かる責務は重かったのだらう。

「エルミダ、陛下にお変わりは？」

静かに目を瞑り、左右に首を振る。

「未だに原因すら分かりません。王都でも名の知れた多くの医師に診断させましたが……」

聞くまでも無く分かりきっていた事だが、それでも口に出してしま  
う。

意識の無いユーリ陛下に一礼をして、静かに寢室を後にしようとし

た時だった。

「エディーネさま」

扉の前で恭しく頭を下げる一人の男性。

高官にのみ着用を許された黒の下地に紫のラインの入った裾の長い高価な文官服を着用している。

長身瘦躯で、五十に近い年齢にもかかわらず、整った美しい容姿に黒々とした艶やかな髪。

落ち着いた物腰に、優雅ともいえるその振る舞いは好印象を受ける。

国王が療養に入ってから、この国が乱れなかったのはひとえに、この男のその優れた政治手腕と幅広い人脈があったからだろう。

「これはホーキン卿」

エディーネも姿勢を整えて一礼をする。

レナード・ロゼ・ホーキンは、穏やかな笑みを浮かべていた。

「ホーキン卿、その者は？」

視線の先に、一人の男が立っていた。

小柄で、どこか陰湿な印象を受ける真つ黒な衣服は怪しげな呪術師のように見える。

「この者は、私が南方の都市を視察に行ったおりに、とある村で医療に順じていた者です。その腕を見込んで私が連れてまいりました」

それだけを言うと、恭しく一礼をして二人は寝室へと歩を進めた。

## 序章 それぞれの思い

依然として国王は深い眠りに陥っていた、ある日のこと。

それは前触れも無く、突然に動き始めた。

「エディーネさま。少しよろしいでしょうか」

声の主は、ウィーゼル侯爵家当主バーゼン卿だった。

五十を過ぎた老齢で、いつもは穏やかな表情のバーゼン卿が、緊張した表情で声を潜めながら呼び止めたことに、ただならぬ予感を覚える。

「どうなされたバーゼン卿」

つとめて平然とした表情で答える。

「このような話を、私どもの口から申さなければならぬこと誠に残念に思います」

無言で、話の続きを促すエディーネ。

「この場で、いくら言葉を取り繕っても仕方ありません。単刀直入に申し上げます」

咳払いを一つ挟み、重々しい口調で語りだす。

## 序章 それぞれの思い

「我々、元老院はユーリ陛下に退位して頂き、次期国王にエディーネ王女を推薦する旨の意見案を次回の元老議会で提出いたします」

ゆるぎない決意のもとで発せられた言葉だった。

それと同時に、エディーネはその言葉の衝撃に一瞬だが思考が止まった。

現在、正統な国王が存命しているにも関わらず、継承順位では劣るエディーネに玉座に就くように促しているのだ。

「な……何を馬鹿なことを！ 貴殿は自分の言葉の意味を理解して言っているのか」

脈拍が急激に上昇するのが自分で認識できた。

掌に汗が滲み、視界が暗くなっていく。

思わず強い口調になるのも仕方が無い。

「エディーネさま！ 今現在、この国には国王陛下が不在ととっても差し障りは無い状況にまで追い込まれております。このままではセフィーリアは外交においても内政においても取り返しのつかない状態に陥ってしまいます」

あくまで、一歩も引かない態度のバーゼン卿は語気を荒げながら続

ける。

その事は、エディーン自身も憂慮していることだ。

このままで行けば、国は二つに分かれてしまう。

「いかに、首席公爵家を取り仕切る七貴族議会といえども、これ以上の国王陛下になりかわり政務をこなす様では、国内の貴族と国民に示しがつきません。我々は王家に忠誠を誓う忠実なる家臣なのです」

これ以上は言葉が続かない。

息を切らせながら、真っ直ぐな瞳でエディーンを見つめる。

二人の間に重い空気が流れる。

「……即断するには難しく思います。後日、改めてお心を確かめに参ります」

その後、一つの条件を課すことでエディーン王女はこの申し出を了承することとなった。

## 第一章 始まりの出会い 廃墟の教会

太陽は次の世界へと旅立ち、淡い月の光が地上を照らし出す頃。

辺境カーナのさらに南、誰からも忘れられ廃墟と化した教会の前……。

男は苦々しく思いながら、そつと背中に手を伸ばし剣の柄を握り締めめる。

視線の先……そこには、強い殺意を漂わせながら剣を構える三人の男がいる。

一人は、白髪混じりの口髭を生やし、鋭い視線は幾重もの死線を潜り抜けた歴戦の戦士を思わせるものがある。

その男を中央に添えて、左右に同じ距離を置きつつ取り囲むように構えるのは、まだ若い青年だった。

三人とも、簡素な鎧に身を包み安物の剣を手に握り、口髭を生やしたその容貌は一見すると流れ者の傭兵か盗賊のように見える。

しかし、男は分かっていた。

その剣の構えと身のこなし……それは隠しても隠しきれない!

叙勲を受けた騎士のものだ。

……身分を隠すための変装

相当に訓練をされ、実戦経験を積んだ本物の剣。

そして、男にはこの者たちの主人に心当たりがある。

「お前たち、ラティーカ家に仕える騎士か……」

静まりかえる風景……返事はない。

しかし、先ほどよりも殺意の濃度が濃くなった。

眉間にしわが寄り、両隣に展開する青年の呼吸が荒くなる。

まるで、狼のように統制の取れた歩調で徐々に間合いを詰め始める。

「王家の番犬が、こんな辺境まで俺を殺しに来たのか？」

そこには、嘲笑にも似た哀れみが浮かぶ。

しかし、男には目の前の敵に自分の首を与える気はない。

掌に力が籠もる。

手に纏わり付くような冷たい感覚。

三人は、思わず息を呑んだ。

まるで、背中から引き抜くように持ち上げた物は、刀剣というにはあまりにも荒つばい物だった。

長い柄も入れれば、二メートルはあろうかというその巨剣は、刀とは名ばかりの鈍い光を放つ鉄の塊だった。

しかし、いち早く気を取り戻したリーダー格の男が、二人に言葉を発した。

やがて、落ち着きを取り戻した三人は、再び男を取り囲むようにけん制する。

それをジロリと見回す男。

今にも斬りかかろうとする青年を目で威圧する。

男の並々ならぬ技量は、リーダー格の男と高度な心理戦へと入り込む。

男は、古びた旅装を纏った旅人のように見える。

無駄の無い鍛え上げられた体つきは、戦場で育んだのだろう。

それを覆う革製の衣服越しにも、男の戦士としての質の高さが容易に想像できる。

年の頃は二十代の後半に差し掛かった円熟期。

職業は、察するに主君を持たずに、戦場を渡り歩く傭兵業だろう。

風が吹き止むほどの静けさ。

巨剣の刃が届く一歩手前に距離を置き、ジリジリと男の間合いを削り取る。

極限状態では、より慎重に相手の動きを見極める。

この理を破ったほうに、死神はその鎌を振り下ろすだろう。

ジリジリと焦らすように時間だけが過ぎていく。

しかし、凍りついたような時は、突然に終わりを告げた。

青年が、締め上げるような圧迫感に耐えられなくなったのだ。

制止する仲間の声を無視して、気合とともに、剣を頭上高く掲げて斬り掛かったのだ。

気合は悲鳴へと変わり木霊す。

向かい来る刃先を完全に見切った男は、紙一重の差でかわし際に両手に握った巨大な剣で刺客を薙いだ。

鮮血が宙に舞う。

斬るというにはあまりにも衝撃的な一撃は、刺客の男を物言わぬ肉塊へと誘った。

それは、斬るというよりも破壊するという表現の方が正しいだろう。

対城戦用の砲火器のような威力は、この超重量の剣に、鍛え上げられた男の並々ならぬ力が重なったときに初めて生み出せる破壊の力だろう。

戦慄という言葉では生ぬるい。

仲間の想像を絶する死に、もう一人の青年の心は乱れた。

激しい焦燥に駆られた青年は、無謀にも剣を水平に構えて走り出す。

男の胸に目掛けて突き立てようとした切っ先。

しかし、直線的で単純な攻撃を男が受けるはずもない。

まるで、ステップを踏むように横に交わす間に、巨剣がその鈍い閃光を走らす。

高速で振り抜かれた鉄塊の前に、鉄製の鎧は意味を成さない。

まるで、紙くずのように拉げた鎧がその衝撃を物語る。

残された熟練の戦士は、唸り声を上げる。

今一度、男と距離を置くように後方に下がると正眼に剣を構えた。

重苦しい空気の中、漂うのはむせ返るような血の香り。

荒れ果てた教会が、この世の終わりを思わせる。

巨剣を両手で支える男は、さながら戦場で死を振り撒く残酷な神の姿に見えた。

頬を伝う冷たい汗……冷静を装うほどに鼓動は激しくなる。

この場を逃げ出したい気持ちと、主君の命に背くことの出来ない騎士の誇り。

険しい葛藤の末、意を決して男の懐に飛び込んだ。

刃に付いた血糊を拭い、再びその背に巨剣を背負う男。

足元には、三体の物言わぬ亡骸が無残にも折り重なる。

三人の死者に、祈りの言葉を残して男はその場を去ろうとした。

思えば、終始隙がなかった男にとって、唯一の油断がこのときに生じたのだ。

## 第一章 始まりの出会い 廃墟の教会

突然、聞こえてきた風を切り裂くような音に、反射的に身を捻る男。

後を追うように、その音は幾度か発生した。

無意識に腕で受け止めたそれは矢だった。

苦い顔になる男。

すぐさま、腕に刺さった矢を引き抜くと教会の中に逃げ込む。

容赦なく放たれる矢に、さすがに逃げるほかに無い。

息を潜めて辺りを窺う。

どうやら、先ほどの三人は男の油断を誘うための陽動だったようだ。

もちろん、本人たちはそのことを知らないだろう。

もし、そのことを知っていれば、無理をせずに体制を整えるために一度引いていたはず。

無意識に舌打ちが漏れる。

刺客を退けた事による、気の緩みを突かれた。

しかし、今の男に自分の迂闊さを責めている余裕は無い。

幾人の刺客が身を潜めているのか分からない。

呼吸を整え、辺りを窺う。

……三人……いや四人か

再び、巨剣の柄に手を掛ける男。

いつでも引き抜けるように構える。

矢が尽きたのか、剣を手に男の潜む教会に駆け寄る人影が三人。

先ほどの、闇に隠れて虚を突く戦法から一転してあまりにも深慮に欠ける。

おそらくは、三人との戦いを見ていたはずだ。

ならば、男に対して接近戦を挑むなど、愚の骨頂だと言っ事が骨身に沁みて分かっているはず。

呼吸が荒くなるのを抑えることが出来ない。

教会内に侵入した刺客は、すぐに男の姿を確認した。

「覚悟しろ」

同時に襲い掛かる三人の男。

今まで感じたことの無い脱力感が全身を支配する。

……おかしい

握り締めた巨剣が、やけに重く感じる。

それでも齒を食い縛り、振り下ろされた三本の刃を受け止める。

その様子を、驚愕の表情で見つめる刺客。

「馬鹿な！」

「即効性のはず」

「に……逃げる」

それが三人の刺客の最後の言葉となった。

巨剣が、鈍い閃光を伴い駆け抜ける。

続いて後を追うように紅の飛沫が舞い散った。

普段の男にとって、このような一撃など造作も無い。

しかし、今はこの巨剣を支えることが出来ない。

……おかしい

呼吸が荒くなる。視界が狭まり、痺れが全身を襲う。

「お前の負けだキリア」

勝利を確信したような口調が聖堂に響く。

堂々と入り口から現れた人影に、男は苦い顔になった。

「……ファীগン」

窓越しに差し込む月明かりが照らし出す人物は老人だった。

年の頃は六十を幾つか超えたくらいだろう。

薄くなった頭髮は真っ白に染まり、特徴的な大きな鷲鼻。

庶民では一生涯身に着ける事が出来ないだろう、着込んだ高価な黒のローブは特別な地位に老人が付いている事がわかる。

「まさか、執事頭のおんたが出向いてくるとはな」

かすれる視界の中に、たたずむ老人を睨みつける。

「それだけ、お前に生きていてもらっては困るのだ」

吐き捨てるような、容赦の無い言葉だった。

見据える冷たい視線には、殺意以外には何もない。

「今の三人も、最初の三人同様の使い捨ての駒……本当の狙いは先ほどの矢か」

「そうだ。たつぷりと、神経系毒が塗ってある」

最初の三人も後の三人も、男を発汗するほどの運動状態にするためだけに集められたのだろう。

目的は、神経毒の回りを早めるためだ。

もちろん、本人たちはその事も知らないはず。

非情な手段である。

「あの者たちも主人の役にたつて死ねたのだ。騎士としてこれほど名誉なことはあるまい」

老人を冷やかな視線で見つめて、男は嘲笑するような口調で訊ねた。

「ハロツクは、元気でいるのかい？」

「……様をつける。貴様如きが、主人の御名を気安く呼んでいいものではない」

怒気を孕む強い口調。

「お前はここで終わる。そして、ラティーカ様はこれからも国王陛下の寵愛を受けてレガリオン王国の発展に尽力されるのだ」

そっと、懐に手を差し込み、短刀を取り出すとゆっくりと男に近づく。

「せめて、己の不遇を嘆き、祈りながら死ね」

両手で握り締めた短刀は、迷うことなく男に、その切っ先を突き立てた。

噴出す鮮血。

「?!」

「惜しかったなファーガン」

心臓を狙った短刀は、確かに男の体に突き立っている。

太く、多くの傷が刻まれている左腕に。

「まだ、体を動かすことが出来たのか！」

激しく舌打ちを漏らす。

「ならば、もう一度」

そう言っつて短刀を抜こうとしたが、浅く突き立った刃がどうしても抜けない。

「そんな、玩具のような剣で俺は殺せない」

血管が浮き出るほどに力の籠もった左腕は、筋肉が硬直して刃を締め付けているのだ。

「ば……馬鹿な！」

激しく狼狽するファーガン。

そして気付いてしまった。

男の右手に巨剣の柄が握り締められていることに。

……ドン

衝突音が聖堂内に響き、うめき声に掻き消された。

最後に残った力を振り絞って、男が巨剣を振るっただ。

驚愕の表情を貼り付けて、ファーガンは床に倒れこむ。

その光景を、重たくなり始めた瞼を開きながら見つめる男。

ついに、男も地面に蹲り、やがて意識を失った。

## 第一章 始まりの出会い 運命の出会い

一体、どれほどの時間が過ぎたのか……。

生きているのか、それとも死んでいるのかも分からない。

こんな事を考えられると言う事は、おそらくは前者なのだろうが。

ただ、分かることは一つだけ。

かすかに、額に温かいものを感じる。

その温かいものが、何かは分からない。

ただ、悪くはない。

むしろ、心地よい気持ちになる。

思い起こせば、あの日から常に突きつけられる殺意の渦の中をひたすら走り抜けてきた。

ここまで、安らかな気分になるのはいつ以来だろう。

そんな事を思いながら、重たい瞼をゆっくりと開いた。

まだ霞んでいる視界に、人影がかすかに映る。

黄金色の髪に、宝石のような青い瞳を持つ美しい顔立ちの人が覗き

込んでいる。

その美しい顔に見覚えは無いが、不思議と身を任せていられる。

ふと、男は思った。

この美しい人は、神々の世界に住まう女神なのか……と。

……どうやら、俺は死んだようだな

苦い笑みを浮かべずにはいられない。

「あなたは……」

男は、かすれる声を振り絞りながら言葉を捜す。

それを、遮るように薄紅色の唇が言葉を紡ぎ始めた。

「まだ、毒が完全には消えていない。もうしばらく眠りなさい」

額に感じた温もりが、ゆっくりと目元に移った。

その温もりで男は悟った。

……生きているんだ

再び、海底深くに引きずり込まれるような強い眠気に襲われた。

## 第一章 始まりの出会い 運命の出会い

冷たい風が、木々を揺らす。

その音で、男は目が覚めた。

まだ少し体が重いが、手足は自由に動く事を確認して周囲を見渡した。

ロウソクに灯る僅かな光が照らし出す光景は、古びた教会の聖堂だろうか。

見覚えがある。

確か、刺客たちに襲われた時に、咄嗟に逃げ込んだ教会。

「うっ！」

左の腕に走る鈍痛に視線を送ると、短刀の刺さった位置には包帯が巻かれている。

二、三度その箇所を撫でながら、ふと、女性の顔が頭に浮かんだ。

かすかに記憶に残る、あの人の姿を探すが見当たらない。

「……夢でも見ていたのか？」

ぼんやりと、まだ纏まらない記憶を整理している時だった。

聴き慣れた衝突音。

それは、間違えるはずも無い。

剣と剣が、ぶつかり合うときに生じる金属音。

思わず、近くに立て掛けられていた巨剣を手に取り、割れた窓越しに外を窺う。

月が照らし出す荒れた庭。

そこには、四人の人影が一人の女性に剣を向けている。

そう、女性は絶体絶命の窮地に立っていた。

細身の剣を抜き、必死に応戦しているが相手が多人数で分が悪い。

呼吸は荒く、目付きは厳しく、黄金色の髪は乱れている。

剣を捌くその動きにも、相手と距離を置こうとする足取りにも余裕はない。

対して、襲撃をしている男たちは、剣の扱いからみても相当の年季の入った騎士だろう。

確実に勝利できる状況になっても無理に攻め入らず、虎視眈々とその隙を窺っている。

徐々に体力を奪い取り、確実に止めを刺すという明確な殺意が見て

取れた。

そして、そこまで襲撃者たちが慎重にならざるを得ないのかが分かった。

襲撃者たちの後ろには三人の男が鮮血の中に倒れている。

どうやら、この女性は孤立無援の状態で三人の男を返り討ちにしたのだ。

剣の技量は並々ならぬものだろう。

たった一人で、騎士相手にここまで戦っていること事態が賞賛に値する。

しかし、それにも限度がある。

度重なる攻撃に、徐々に女性の体力が限界に近づいているのだろう。ジリジリと後ろに下がり、ついに教会の壁にまで追い込まれてしまった。

片方の膝が地面に落ち、激しく乱れる呼吸。

剣を握る腕はかすかに震えている。

ただ、その眼は険しく、何か決意が見て取れる。

どうやら、一人でも多くの襲撃者を道ずれにと考えたのだろう。

思わず巨剣の柄を握り締めた。

## 第一章 始まりの出会い 運命の出会い

ようやく終わりを迎えようとしている。

目の前には、厳しい目付きでこちらを見据える標的が一人。

誰の目にも、この標的が反撃できるほどの体力を残しているようには見えない。

あと一度、剣を振るえば全てが終わる。

その思いのもと、一思いに苦しまないよう水平に剣を構えてその胸に突き立てようとした時だった。

その瞬間、何が起こったのかわからない。

突然、煙を上げて教会の壁が崩れ落ちた。

いや、壁が壊されたと言ったほうが正しいだろう。

それは、砲撃にあつたような強い衝撃だった。

続いて、煙の中に背の高い人影があることに気付いた。

鍛え抜かれた見事な体つきに、鋭い目付きは数々の死線を潜り抜けてきた者が放つ独特の強い光があつた。

「貴様、何者だ！」

襲撃者の一人が声を荒げて叫ぶ。

しかし、その男の手に握られた得物を見るや否や表情が一変した。

「その巨大な剣……まさかお前はギルドの……」

それが、その男が口にした最後の言葉となる。

振り抜かれた巨剣は、暴風を巻き起こしながら男を斬り払う。

驚愕と戦慄が辺りを支配する。

「なぜだ！ どうやって貴女があのだのギルドの戦士を雇うことが出来たのだ」

悲鳴にも似た叫びが辺りに木霊す。

「ハアハア……ギル……ド？」

どこかで聴いたことがある名前だった。

しかし、女が思い出すよりも早く、男はその剣を振るう。

次々と驚愕の表情を貼り付けたまま、地面に倒れこむ襲撃者。

戦士としての桁が違った。

男にとって、恐怖に囚われた騎士の剣など恐れるに足りない。

最後の男が倒れるのを確認してから振り返る。

そこには、鋭い目付きの女性がこちらを睨んでいた。

「どづいつつもりです?」

助力に対する感謝の言葉でも、突然の協力者を与えてくれた神に対する感謝の祈りでもなく、女性の第一声は厳しく突き刺さるものだった。

青い瞳には強い光が灯る。

意外な反応に困惑する男。

「……すみません。まずは、ご助勢に感謝すべきでした」

苦い顔つきになり、頭を下げる。

「この者たちは一体?」

血糊をふき取りながら尋ねる男。

教会の壁にもたれながら、呼吸を整えて女性は答える。

「私の命を狙う者……それ以上の事は知らないほうがいいです」

それは、忠告というよりは警告に近い口調だった。

これ以上を知れば、命の保障は無いと。

「しかし、あの者たちは野盗の類には見えない。あの剣筋は、訓練された騎士のものだ。そのような者が、おのれの名誉をかなぐり捨てて多勢で一人の女性を襲うのか？」

騎士たるもの、戦いにおいては正々堂々と、一度戦場に掛け出れば主君のために。

決して、おのれの剣を侮辱せず、主君の恥となる行動は慎む。

それは、卑劣な行動が主君の名誉に傷をつけるからだ。

大体、騎士として恥じるような行動を取る者を、どの領主が雇い入れようか。

それは、古今の法のようなもの。

「かなぐり捨ててでも、私に生きていてもらっては困るのでしょう」

どこか、醒めたような口調で答える。

そこには、感情というものが存在しない。

ただ、事実だけを述べるように淡々としていた。

## 第一章 始まりの出会い 運命の出会い

ふと、男は思う。

「貴女の連れの者は？」

女性の一人旅など聞いたことが無い。

ほとんどの女性が生まれ育った町や村から外に出ることなく生涯を終える。

相当な商家の生まれでもない限りありえない。

もし、仮にそのような奇妙極まりない行動を取るにしても、最低限の準備が必要だ。

男でも、長旅には必ず大人数で共に行動するか、傭兵団を雇う。

なぜなら、どの国にも法の目が届かない場所が存在するからだ。

そして、そのような場所は必ずといっていいほど盗賊野盗の巣窟となっている。

そのようなところに、女性が一人で旅をしようものなら、瞬く間に奴隷商人の手のもとへと売り飛ばされるだろ。

様々な辱めを受けて……。

草臥れた旅装を着て、色褪せたマントを纏うその人は相当の長旅をしているはず。

「そのような者はいません」

まるで、当然の事のようにはっきりと言い切る。

「なっ！ よく、今まで無事でいられたな。この辺りは治安の悪さは並みではない。教会ですらこのような状態に陥る神の見捨てた土地なのに」

感心した様子で話す男。

思わず、笑みが毀れる女性。

「ごめんなさい。久しぶりに温かい感情に触れたので少し気持ちが高揚したようです」

男を見上げるその青い瞳に、初めて柔らかい光が宿った。

それは、とても優しい光だった。

しかし、その光はすぐに消え去る。

「でも、私と一緒にいるところを誰かに見られたら、貴殿の身も危ない。早くこの場から離れたほうがいい。私も長くこの場に居すぎました」

それだけ言うと、鞘に収まった剣を杖のように使い、ふらつきながらも歩き始めた。

「そんな状態で、どこに行く気だ？」

「それは分かりません。ただ、身を隠せる場所を探します」

その姿は、あまりにも悲しかった。

逃亡者の生活というものを痛いほど男は理解している。

頼るべき者も場所もない。

いつ現れるとも知れない刺客たちの襲撃に備えながら、眠れる夜など望めるはずもない日々。

命を狙われているのなら、人ごみの多いところに行くほうがいい。

そんな事を、教えてくれた者がいる。

しかし、それは素人相手の話だ。

経験を積み重ねた、暗殺を職業としている者にとって人の多い少ないなど関係がない。

気付かぬ間に、遅効性の毒の付いた爪か何かで体を傷つけられて、夜に宿で眠りながら死ぬ何てこともざらにある。

なぜ、この人はここまで隠者のように生きなければならないのか。

なぜ、ここまで傷つかなければならないのか。

男には分からない。

この年頃の女性ならば、良い人と恋に落ち、誰もがつかむような当たり前の幸せに向かい歩み始める頃だろう。

だから男は、慎重に言葉を選びながら尋ねた。

「俺には、貴女が命を狙われるような大罪を犯した者には見えない傭兵として、多くの人と契約を交わした男には、人の本質を見極める目に自信があった。

いかに、綺麗に着飾り、善人の仮面を被ろうとも人は本性を隠すことは出来ない。

「貴殿には関係の無いことです」

再び、瞳に強い光が灯る。

しかし、男は確信した。

この人は、無実の罪で命を狙われているのだと。

男の中で何かが動いた。

そして、意を決したように尋ねる。

「解毒と傷の手当てをしてくれたのは貴女で間違いないか？」

先ほどまでの男の口調とは、明らかに違った。

あくまで慎重に尋ねる。

その意味を、女性は知る由も無い。

男の突然の変わりように戸惑いながらも答えた。

## 第一章 始まりの出会い 運命の出会い

「貴殿は運が良かったのです。ちょうど市井で調達した薬草の中に解毒作用のある物がありました。三日ほど眠りについていましたが、貴殿の強さが命を取り留めたのでしょう」

男は、驚きを持って答える。

「三日もの間、貴女は意識の無い俺を見守ってくれたのか」

「あのまま、置いていくわけにはいきません」

当然だ。といわんばかりの口調だった。

男の拳に力が入る。

「この命は、助けてくれた貴女のために使いたい」

それは、どこか決意に満ちた口調だった。

突然、男は女性の前に立ち塞がった。

自分よりも、頭ひとつほど小さな女性をマジマジと見つめる。

「な！ どういうつもりです？」

柄に手を掛けて身構える女性。

「命の借りは、命で返す」

片膝を付き、頭を垂れる男。

それはまるで、主君に忠誠を誓う騎士のように見える。

その様子を呆然と見つめた。

そして……。

「何を言っているのです！ 先ほどの言葉を聴いていなかったのですか。私はセフィーリアから命を狙われているのですよ」

思わず、声を荒げてしまったが、自分の失言に舌打ちをする。

「セフィーリアとは中央に名だたる大国のことか」

そのままの姿勢で、問いかける男。

「そうです……詳しくは聞かないでください」

言葉とは裏腹に声が震える。

それは、今にも泣き出しそうな、か細い声だった。

胸を押さえて、必死に感情を押さえ込んでいる。

「貴殿が優れた戦士でしたら、私ではなく他の者を探して仕えてください」

呟くような小さな声だった。

「俺は、主君を持たない自由戦士だ。だからこそ俺は俺の信じた道を進む。仲間がいけないというのであれば俺の剣を使えばいい」

男の決意は揺るがない。

「これは私の問題。それに……もう、誰も巻き込みたくは無い。傷つけたくない」

うつむき、視線をそらす女性。苦い思い出が脳裏に浮かぶ。

「それに、私にはその剣に報いる物などなにもありません。そればかりか、貴殿の剣に不名誉が付くことになります」

苦々しい表情だった。

過去に何があったのか男は知らないが、察するに余りある苦悩を背負っているのだろう。

「もう既に、報酬は受けている。それに、祖国に裏切られ、あまつさえ反逆の汚名を着せられた俺にとって名誉も何もいらぬ。ただ、命を助けられた借りを返す」

その言葉にハツとなる。

目の前で、頭を下げる男も自分と同じような境遇にいたことが分かったからだ。

ゆっくりと立ち上がる男。

「俺の名はキリア・ディオーン。傭兵組合ギルドに属する戦士だ。これは誓いだ……俺は貴女の剣となるっ」

高々と宣言する男。

傭兵組合ギルドとは、ギルドに絶対的忠誠を誓約する世界最古の戦士組合の事だ。

一流の剣の腕前と揺るがない精神を持ち、ギルドが定める掟を全てにおいて優先できる戦士たちである。

ギルドの掟は非情なまでに厳しい。

たとえ、契約を交わした国が敗北しようとも、その結果命を落とすことになるうとも契約終了のときまでは決して裏切らない。

たとえ、敵対する国にギルドの戦士がいようと決めて寝返ってはならない。

もし、ギルドの戦士同士が敵対したときは、命を奪ってでも契約を遂行せよ。

そのため、各国は絶対的な信頼、信用をもって莫大な金額を展示する。

そして、その契約を受けるか否かは各個人の裁量に任されている。

いつ、誰と契約を交わそうと、掟を遵守すればかまわない。

ただし、一度でも契約を不履行してしまえば、いかなる理由があつたとしてもギルドから制裁を受ける。

それは絶対なる死。

だからこそ、ギルド所属の戦士は、契約相手を見極める優れた目が必要となる。

契約者の立場、相対する敵、現状の戦力。

その全てがはじき出す答えは、彼女との契約は避けるべきと男に告げる。

しかし、男にはギルドの掟以上に重きを置く言葉がある。

「困っている人がいたら全力で助けなさい。今は亡き母上が常日頃から俺に言い聞かせた言葉だ」

啞然とした表情で男を見る女性。

そこには、嘘偽りのない顔がある。

驚きの感情は次第に薄れていく。

そして、抑えきれなくなり、ついに声を出して笑ってしまった。

久しぶりにお腹を押さえ、涙さえ浮かぶほどに。

「貴殿は、相当の変わり者ですね」

思わず、その場に座り込み噛み締めるように笑う。

やがて、それは頬を伝う涙へと変わった。

「褒め言葉と受け取っておくよ」

手を差し伸べる。

それは、大きな掌だった。

傷だらけで、幾つも肉刺が出来ている戦士の掌だった。

一瞬迷いながらも、差し出されたその大きな掌を優しく握りしめた。

そこには、先ほどの勇ましい戦士の表情は消え去り、愛らしい笑みを浮かべる一人の美しい本来の女性の顔があった。

「私は……」

一瞬の躊躇いが顔に浮かぶが、意を決したように。

「私はエディーネ。お互い、自国には相当に苦しまされているようですね」

のちに、この二人の出会いが大陸を震撼させる事になるとは、このとき誰も知る由が無い。

ただ、時間は必然的に一人を結びつけ、新たな運命へと世界を誘う  
こととなる。

## 第二章 二つの真実 二人の戦士

焚き火の炎が闇夜に踊る。

ウルグナの森に入って二日目。

彼女と行動をともにして、一週間の時が流れた。

相変わらず、人目を避けるように地元の間人からも忘れ去られたよ  
うな古びた街道を進む。

何か目的があるわけでもない。

ただ、同じ場所に長くいると、刺客に襲われる可能性が高くなるか  
らだ。

そのために、彼女は動き回っている。

ロープを纏い、表情を読み取れないほど大きなフードを被り、見た  
目には聖地を巡回する巡礼者のように見える。

「貴女は、長い間このような生活をしているのか？」

静かに燃える炎の中に、灌木を投げ入れながら向かい側の女性に問  
いかける。

「……もう、一年になります」

両膝を胸に抱え、頬を埋めながら炎を見つめる。

揺らめく炎に照らし出された、美しい顔に表情は無い。

「辛かったのは、最初の二、三日だけ。あとは、いつ襲い掛かってくるとも知れない追っ手から逃れるために、必死でしたから」

ゆっくりと顔を上げて、満天の星空を見上げて呟く。

不意に、笑みがこぼれる。

「それにしても、キリア殿は酔狂な人ですね」

再び、視線は炎に注がれる。

「私のような者と、行動をとんでも何も得なことなど無いのに」

どこか、しんみりとした口調だった。

そこには、孤立無援のなかで奮闘してきた自分にはじめて出来た協力者に対する感謝の言葉が隠れていた。

## 第二章 二つの真実 二人の戦士

炎に焼かれた灌木が、その高熱に負けて弾ける音が小さく響く。

「キリア殿は、なぜ傭兵となられた？」

ふと、エディーネは疑問に思った。

この一週間、幾度が刺客と相対する場面があった。

その度に、この男の並外れた戦士の力量を目の当たりにしている。

望めば、正規の騎士団にも入団できるだろう。

事実、この男の戦いにおける冷静で的確な状況判断にはエディーネも舌を巻く。

「それは……」

男が口籠りながら答えようとした時だった。

「自国の国王さまに裏切り者の烙印を押されたからだよ！ そうだろキリア君」

場違いなほどに明るい口調が深い森の奥から聞こえた。

すぐさま、剣の柄に手を掛ける二人。

「出て来い、ハイネ！」

声を上げる男。

どうやら、声の主に心当たりがあるようだ。

暗闇に沈む木々の中から現れたのは、若い男だった。

北方に住む民族特有の鮮血よりも濃い真っ赤な髪に、僅かに幼さを残る笑みを貼り付けたような顔立ち。

楽士のような服装に、頼りないほどに細い体つき。

飄々とした印象を受ける。

「どういってもりだ？」

険しい表情のキリア。

「キリア殿、この者は？」

並々ならぬその剣幕に、ただならぬ事と感じながらも問う。

「ハイネ・ガルシア。ギルドでも五本の指に入る狂戦士。もっとも戦場で相対したくない男だ」

思わず息を呑む。

## 第二章 二つの真実 二人の戦士

「どついつつもりだっけ？ 何を言っているの」

わざと、少し呆れたような表情を浮かべる。

「ギルド本部以外で戦士同士が出会う事象は二つに一つ。一つは、同じ契約者のもとで共闘すること。もう一つは……」

希薄な笑みを浮かべながら、ハイネは素早い動きでキリアとの間合いを破った。

激しく剣がぶつかり合う音が響く。

「異なる契約者のもとで、互いが利害関係にあるときしかないじゃないか」

歯を食い縛りながら、巨剣で防ぐキリアの表情は険しい。

「さすが！ ギルドで唯一、このボクが尊敬するだけのことはある」  
ニヤリと笑みを浮かべると、キリアと間合いを取るように後方へと跳んだ。

「今日はただの挨拶だよキリア君。それに、ボクの標的はそちらのお姫さまなんだから」

相変わらず、不敵な笑みを浮かべた顔で女性をみる。

鞘に剣を収めると、恭しく頭を下げた。

「お初にお目に掛かりますよ。セフィーリア王国、元王女エディーネさま！」

どこか、馬鹿にしたような口調で女性を嘲笑する。

対して、キリアは僅かに驚きの表情を表したが言葉にはしない。

しかし、その僅かの表情の変化を見逃さないのは、流れる空気や相手の気配を読むことに優れた戦士だからだろう。

「おや、キリア君は知らなかったのかい？ まあ、最近ようやく契約を完了して帰ってきたことだし、知らなくても仕方が無いね」

面白そうに話し出すハイネ。

## 第二章 二つの真実 二人の戦士

「このお姫さまはねえ、実の弟で現国王でもあるユーリ陛下の暗殺未遂と王位篡奪の罪で第一級の尋ね人となっている人だよ。見つけ次第、生死を問わずに王国に連れてくるようにという極秘の手配書も出回っている」

「何を言うか！ 私は、陛下の暗殺や王位篡奪など……」

顔を赤くして、命一杯の声で否定しようとする。

しかし、エディーンは言葉を遮られる。

「……………！！」

目に映らないほどの剣速で、ハイネは腰から剣を抜くと、そのままの速度でエディーンの首もとに剣先を突きつけたのだ。

「今、ボクはキリア君と話をしているんだ。君は黙っている」

嘲笑するような顔だったが目元は笑っていない。

放たれる強烈な殺気に足がすくむ。

「君なんて、いつでも殺せるんだから」

今まで、エディーンを命をつけ狙っていた者たちとは桁が違う。

間髪を入れず、その剣を払いのけて間に入り込むキリア。

「本当は、こんなつまらない契約なんてさっさと終わらそうと思っ  
ていたけど、君と戦うことが出来るなんてね。これは、想像以上に  
楽しくなりそうだ。契約者に感謝しないといけないね」

それだけを言うと、踵を返して深い暗闇を孕む森の中へと姿を消し  
た。

## 第二章 二つの真実 真実

「厄介な奴が相手になってしまった」

険しい表情のキリアは、大きな切り株の上に腰を下ろして考え込む。

「……一つだけ確認したい」

それは、真剣な眼差しだった。

「分かっています」

静かな口調で話し出すエディーネ。

「確かに、私はセフィーリア王国の国王となるはずでした」

事実をそのままに述べるように、抑揚のない淡々とした口調だった。

そこには、過去の栄光への未練も、奪い取られた地位への執着も感じられない。

「ユーリ陛下は、原因不明の病により政務が出来ない状況が長く続きました」

つとめて平静を装うように、静かな口調で言葉を紡ぎ始めた。

「その状況に業を煮やした王国元老院は一つの案を提示したのです」

押し殺しても隠し切れない思いが見え隠れする。

「それは、ユーリ陛下に王位から離れていただき、私に戴冠を促すものでした……もちろんですが、私はその申し出を断りました」

迷いのない口調だった。

「当然です。この国には、正統な国王がおられるのだから……。ですが、王国がこれまでにない危機に瀕していることも事実。現在、国内の貴族たちは王国の諮問機関である七貴族議会が取りまともています。実際に、議長のホーキン卿はよく働いてくれます。しかし、王国に両雄並び立たず。このままでは貴族たちの忠誠は国王から離れてしまう。言葉にすることも甚だしい事ですが、このままの状況では王家の交代劇にもなりかねません」

事実、徐々に力を増し始めた七貴族議会は、王国の最高機関である元老院をもその権威において凌駕し始めた。

## 第二章 二つの真実 真実

「国王の助言機関である元老院とは違い、七貴族議会はあくまで貴族たちを統率し、貴族間の紛争を防止することを目的に作られました。そのために、王国でも上席の大貴族で構成されています。しかし、その事が仇となりました。元老院議員は、皆が高い位にある貴族とは限りません」

血統よりも能力を重視した元老院と、血統を重視した七貴族議會。

誇り高い貴族から見れば、どちら側を支持するかは火を見るより明らかだった。

元老院の唯一の強みであった、国王の助言機関という立場も、ホーキン卿が国王の政務を代行している現状では意味を成さない。

「ホーキン卿は元老院議員ではないのですか？」

元老院は能力重視だという。

ならば、元老院を凌駕するほどの実績を生み出したホーキン卿ならば、問題なく元老院議員になれただろう。

「ホーキン卿は、元々は元老院議員でした。当時はまだアシム卿としてホーキン公爵家が治める領地の一部を任されていました。しかし、公爵の爵位と広大な領地を受継いでしばらくしてから議員を辞職し、七貴族議會に入りました……」

エディーネは、ほんの僅かな時間だったが口籠った。

「……話が、外れてしまいましたね」

キリアも納得して頷いた。

「私は、ひとつの条件をつけることで、その申し入れを受けることを了承しました」

ハッキリとした迷いない言葉だった。

「ひとつの条件？」

「退位に関する事です。私はその時期を決定するというもの」

呟くほどに、小さな声だった。

しかし、男にはその小さな声で紡いだ言葉の中に含まれた深い思いの籠もった響を聞き逃さなかった。

「ユーリ国王が目覚めるまでの間ということですか？」

そつと目を閉じて、小さく一度頷いた。

誰よりも王国の行く末を案じ、国王の身を案じている。

そのような人がなぜ、今このような状況に追い込まれているのかが理解できない。

本来ならば、こんな所で息を潜めているような人ではない。

セフィリア王国の王宮で玉座に座り、女王として政務に勤しんで  
いるはず。

「すぐてはあの日、ローレンス神殿から始まりました」

## 第二章 二つに真実 ローレンス神殿

そう、あれは秋晴れの少し肌寒い日だった。

王国に新たな歴史が刻まれる日。

「参りましょうか」

この日の戴冠式を取り仕切る紋章院のクルーゼン伯爵が、王宮の一室で控えるエディーネを迎えに来た。

傍に控えた女官たちがそそくさと部屋を出る。

そこには、これから女王としてセフィーリアに君臨するに相応しい純白のドレス姿のエディーネがいた。

首下には大きな真珠のネックレスが下がり、金糸で縫い取られた王家の紋章が胸に輝く。

セフィーリア王国では、天啓主義教会を国教に定めている。

そのため、戴冠式はセフィーリア王国における天啓主義教会の総本山ローレンス神殿で執り行うことが建国時からの通例となっている。

伝承では二千年以上も昔に建築されたとされる長い翼廊を持つ神殿は、穹窿の荘厳な塔が天高くそびえ立ち、外壁には名だたる名工達はその生涯を賭して彫り上げたという聖典に登場する天使たちが空を目指して飛び立つ様が神々しい姿が描かれている。

神殿の大聖堂には多くの列席者であふれ、中に入れない一般市民は神殿の外に集まっている。

その光景たるや、王都中の人々が全てこの場所に押し寄せたようだった。

聖職者席には、国内でも名だたる司教と司祭たちがその時を待っている。

やがて、聖歌隊席の合唱隊がその美声を惜しげもなくふるい、さらにパイプオルガンの音色が重なる。

外に集まった市民達が大歓声を上げる。

それは徐々に王都全体へと広がりを見せる。

そう、女王となるエディーネがローレンス神殿に到着したのだ。

## 第二章 二つの真実 ローレンス神殿

馬車から姿を現したエディーネを一目見るなり、市民の中から感嘆のため息が漏れる。

女王としての威厳に満ちたエディーネは、ゆっくりと微笑みながら神殿に入った。

祭壇に立ったコーエン大司教が、戴冠式を執り行うことを宣言して式は静粛な空気の中で始まった。

祭壇上に設置された戴冠式用の椅子にエディーネが着き、コーエン大司教が神々の祝福を願った祈祷を執り行う。

つつがなく進み行く式も、ついに待ち望んだ瞬間が訪れようとしている。

いよいよ、大司教の手に王位を示す王冠が渡されたのだ。

息を呑む聴衆。

耳が痛くなるほどの静寂の中、ゆっくりとエディーネの前に立つ大司教。

静かに、王冠がエディーネの頭上に納まるうとした時だった。

「皆さま、ご静粛に願います！」

突如として、大聖堂に響く男の声。

男は、文官服を纏っている。

エディーネには見覚えがあった。

「モーガン副司令官？」

男は、王国騎士たちの頂点に立つ近衛騎士団の副司令官を勤めるモーガン・コールデン子爵だった。

その並外れた武勇により若干四十歳でこの職についた稀代の英雄だった。

「何事だ！ 場をわきまえろ」

神聖な場には、不釣合いなその声の主に対して一喝したのは元老院議員のルーモア伯爵だった。

怒りもあらわに男に駆け寄るが、伯爵の顔色が変わった。

男はあろう事か、伯爵に剣を向けているのだ。

「お静かに願います」

## 第二章 二つの真実 ローレンス神殿

男の言葉と同時に、聖堂内に雪崩れ込んできたのは他国にもその名が轟くセフィーリア王国近衛騎士団第一師団だった。

「現在、エディーネ王女に二つの嫌疑が掛けられています」

男は、なにやら紙面に目をやりながら話す。

「同時に、元老院議長シリア侯爵と副議長ケイト伯爵。それにバーゼン公爵にルーモア伯爵も。現時点を持って王位篡奪に加担した罪で逮捕します」

どよめく大聖堂内、理解できない様子の列席者は間抜けな表情をずるより無かった。

「エディーネ王女、貴女にも王位篡奪の嫌疑が掛けられています。さらには……」

その後の言葉が、エディーネの頭には入ってこなかった。

「な………何といいました？」

言葉とは裏腹に、その表情は凍り付いていた。

今しがた、モーガンが口走った言葉の意味が分からない。

「何度でも申しませう。エディーネ王女には、王位篡奪と国王ユ

「り陛下の暗殺未遂の容疑が掛けられています」

鋭い視線は、エディーネを射抜くように見据える。

「何を言っている！ 王女……いや、今は正式に戴冠式を終えられてセフィーリアの女王となられた方に」

声を荒げるケイト伯爵。

普段の温厚さをかなぐり捨てて男に掴み掛かる。

「まだ、王冠を受け取ってはおられない。式の間のはずです。故に、まだ正式には王位には就いておられない」

確かに、エディーネの頭上に納まるべき王冠は大司教の手の中にある。

「我々としても残念ではありません。しかし、国王暗殺はそれを考えただけでも死罪。陛下の容態を考えれば、実の姉君に在らせられる王女といえども……」

## 第二章 二つの真実      ローレンス神殿

「待ちなさい。なぜ、エディーネさまがその容疑に掛けられている  
威厳あるその声で、モーガン副司令官に問い詰めるのは元老院議長  
シリア侯爵だった。」

長年、元老院の長として政治に関わってきただけあり、このような  
状況でも冷静に対応している。

「これは、元老院議長シリア殿。では、お話いたしました。まず、  
王位篡奪罪に関して。国王の意思を無視して、助言機関に過ぎない  
元老院の言葉に惑わされ王位に就こうとした事が国王陛下から玉座  
を奪い取るうと画策した事になります。セフィーリア王国では国王  
は崩御されるまで国王です」

凜猛な獣のような唸り声を上げるシリア侯爵。

確かに、国王の退位など王国が建国されて以来、聞いたことが無い。  
国王退位を臣下の者のみで決定したという後ろめたさが無いわけ  
はない。

「続いて、国王暗殺未遂。これは、エディーネ王女にしか実行でき  
ません」

断言しきったモーガン副司令官。

昔、剣を握って戦場を駆け抜け、敵の騎士を震え上がらせた頃のよ  
うな鋭い目付きでモーガンを見据えるシリア侯爵。

「その理由、是非とも聞かせていただきたい」

それは、今にも斬りかかりそうな強い圧力が込められている。

しかし、モーガン副司令官も並みの騎士ではない。

竦み上がるような圧迫感にも涼しい顔つきで答える。

「国王陛下の寝室に入るには、幾つもの身体検査を受けなければな  
らないことは知っておられますね」

静かに頷く。

「ひとつだけ例外があります。それがエディーネ王女です」

王族であるエディーネは、そのような身体検査を受けずに入室でき  
た。

## 第二章 二つの真実 ローレンス神殿

「なっ！ それだけの理由でエディーネさまを疑うのか？」

「以外には、誰も毒物を持ち込むことは不可能なのです」

「毒？」

今の今まで、国王は原因不明の病で療養されていたはずだった。

「極秘裏に調べていた我々は、陛下のご容態は病ではなく、徐々に体力を奪い去る毒物だということを解析しています。そして、その毒物を室内に持ち込めたのは現在王女以外にはありえません」

その口調は、曲げることの出来ない証拠を掴んでいるような雰囲気がある。

「ふざけるな！ 女王は、誰よりもユーリ陛下のことを気に掛けていらっしやっただ。そのような行いをするはずがあるまい」

息を切らせながら抗議する侯爵。

「どうやら、このまま話し続けても平行線のままのようです。この者たちを拘束しろ！」

その後、聖堂内はその神聖な場にも関わらず、悲鳴と怒号が飛び交う地獄の様な光景へと姿を変えた。

「エディーネ王女を捕らえろ！」

素早い動きで、取り囲もうとする近衛騎士たち。

「女王陛下をお守りしろ」

激しい争いは、列席者の中に多くの怪我人を生み出し、多くの者がその場で捕えられた。

しかし、捕らえられた者たちの中にエディーネの姿は無い。

元老院議員の者たちが身を挺してエディーネを大聖堂から脱出させたのだ。

その後、放浪中に耳にした噂で、元老院の者たちの多くが捕らえられ投獄されたと聞く。

## 第二章 二つの真実 話の集い場

翌朝は気持ち良く晴れ渡った。

森を抜け、寂れた街道を進むと村が徐々に姿を現す。

フォンブルグ公国の王都ルーゼルから、東に外れたカーズ地方の田舎都市のひとつ。

クスール村は、どこにでもある小さな村である。

ただ、フォンブルグ公国内の天啓主義教会の聖地が村の近くに存在する。

そのため、巡礼地を目指した巡礼者がこの村を経由する。

村に入ってから、宿屋がやたらと目に入るのもそのためだろう。

町の規模の割に賑わっていた。

「キリア殿、ここは？」

そこは、村の宿屋を見回しても、平均的なレンガ造りの宿だった。

二階建ての建物の入り口には、フォンブルグの標準語で『話の集い場』と書かれた看板が掲げている。

「ここに入るのですか？ しかし、私は宿代を出せるほどお金が…

…」

「お金に関しては大丈夫だ。それに目的は別にある」

頭ひとつ分、背の高いキリアの顔を覗き込む。

「目的……?」

少し、困惑した表情だった。

「そう」

そんなエディーネをよそに宿屋に入っていく。

木製の扉を開くと、心地の良い木の香りが二人を出迎える。

そこは、大広間が広がっている。

広間の奥には大きな暖炉があり、その周りで巡礼者が談笑している。

「いらつしゃい」

巡礼者と談笑していた中年の女性が、二人の姿を見つけると張りのある声で出迎えた。

「ようこそ『話の集い場』へ。私がこの宿の主人です」

白髪交じりの髪は結い上げ、小柄で少しふっくらした全体的に丸い外見。

気の良さそうな笑顔は、ほんのりと心を癒される。

厳格な巡礼者たちが、女主人を囲んで楽しげに話しに興じるのも分  
からなくはない。

「あら！ キリア君じゃない。久しぶりね」

朗らかな笑みを浮かべて、まるで旧友を迎えるような口調だった。

まるで、母親のように優しい抱擁のあとで、キリアの後ろに立つ女  
性の姿に気付いた。

「そちらのお嬢さんは？」

「諸事情がたくさんあって。部屋を一つ借りたいんだ」

「……わかったわ。部屋を用意するから、少し待ってね」

静かに、二階に向かう階段へと二人を誘った。

## 第二章 二つの真実 話の集い場

案内されたのは、この宿の一室。

普遍的な部屋だった。

部屋の奥に一人用の寝台が置かれ、小さな机が備え付けられている。

一夜を過ごすには、申し分ない一般的な宿の一室。

「キリア殿、この宿屋には何があるのです？」

いぶかしむような顔つきで訊ねる。

「もう少し待っていていれば分かる」

背中に背負った巨剣を壁に立てかけながら、警戒する様子もなくキリアは話す。

立て掛けられた巨剣の重みで、壁が軋む音がエディーネの耳に入っていた時だった。

「いらつしやい。本当に久しぶりだわ」

部屋の扉をノックもなく開いたのは、先ほどの女主人だった。

満面の笑みを浮かべながらズカズカと部屋に入り、呆気にとられるほどに軽快な口調で女主人は話し出す。

「ルクフォールの戦役以来じゃない。あの時は、この辺りにも反乱軍の奴らが押し寄せて大変だったのよね」

火が着いたように、矢継ぎ早に言葉を投げかける女主人。

それは、まるで氾濫した川のように、次から次へと言葉という激流が流れ出る。

「すまないが……この続きは、またいずれにしてもらえないか」

疲れ果てた表情で女主人の言葉をさえぎるキリア。

このままでは、女主人の話だけで今日という貴重な一日が終わりを告げてしまいかねない。

「あら、ごめんなさいね。職業柄、口を動かしていないと落ち着かないのよ」

ケラケラと声をあげて笑い、咳払いを一つはさんだ。

「そちらのお嬢さんとは初対面よね。私は、この宿の主人リリアと言います。宿の主人以外にもいろいろと情報を取り扱っているわ。よろしくね」

愛嬌の塊のような笑みでエディーネを見つめる。

「私は、その……」

本名を名乗るべきかどうかの躊躇いから口籠る。

「駄目よ！ 相手が名乗ったら、ちゃんと自分も名乗らないと。と言っても、貴女の容姿を見れば誰だか想像は付くけどね」

わざと呆れた口調を使い、悪戯っぽい笑みを浮かべて相手の反応を見る。

「エディーンと申します」

僅かの間を挟んで、エディーンは静かに言った。

## 第二章 二つの真実 話の集い場

「それにしても、キリア君。突然現れたかと思うと、貴方はすごい人と契約したもののね」

キリアから、一通りの説明を受けて改めて感嘆のため息を吐く。

リリアは紅茶を口にしながら、向かいに座る二人を見比べた。

片方は、整った顔つきに勇壮な雰囲気漂う歴戦の戦士。

もし、この男の素性を知らずに相対していれば、その容姿や佇まいから貴族の子息と勘違いする婦女子も多かるう。

恵まれた体躯には、動きの邪魔にならないように必要最小限の筋肉を纏う。

太陽に焼かれて少し灰色がかった黒い髪。

黒い瞳は、その奥に燃えるような強い光を宿している。

ギルドの中でも屈指の巨剣使いだ。

対して、その横に座るのは気品高い美しさを纏う絶世の美女だった。

黄金色の髪を背中の中半ばまで伸ばし、吸い込まれるような輝きを放つ碧眼。

草臥れた旅装束ではなく、豪華なドレスを纏い化粧を施せば、舞踏会で全ての紳士を惹きつけるだけの強力な魅力の持ち主だ。

「反逆王女……私の情報網では、第一級の尋ね人よ。『生死を問わずに』だからね」

当然だろう。

世間ではエディーネは、王家の人間でありながら国王の暗殺未遂と王位篡奪を企んだとして最上級の不敬罪に問われている。

もちろん、その事が真実ではなからうとも。

「その上に、ハイネ君だっけ？ あの北方の狩猟民族の生き残りに狙われたとなると、今まで生き残っただけでも賞賛に値するわ」

紅茶に口をつけながら、ため息混じりの視線を向ける。

「ハイネが、王国の誰かと契約したのは事実だろう。奴一人が彼女の命を狙うのであれば、俺一人でも何とかなる。しかし、他の戦士が王国と契約してハイネと協力したら……」

その時は、命を捨てる覚悟が必要となる。

「分かっているとは思っけど、一度契約を交わした相手は……」

「たとえば、命を失うことになるうとも……。ギルドの掟は絶対だ」

そこには、微塵の後悔も感じられない。

その態度に、少しだけ呆れた表情を覗かせながら、隣にすわるエディーンに目を向けた。

「それにしても、エディーンさん」

優しい温かみのある口調だった。

全てを見透かしたような、淡い瞳がゆっくりと覗き込む。

「がんばったわね」

その言葉が、エディーンへの古い記憶を呼び起こす。

幼い頃に亡くなった母親の記憶。

その表情すらよく覚えていない遠い昔の思い出……母の言葉。

「よく、この一年間一人で耐えてきたわね。大切に思った王国に追われて、幾つもの悪意に晒されて……」

エディーンへの傍に歩み寄り、優しく抱きかかえた。

その温もりに、思わず涙がこみ上げる。

この一年の苦しみが、走馬灯のように脳裏に浮かんだ。

「……はい」

涙に濡れて言葉にならない。

## 第二章 二つの真実 話の集い場

「はつきりとは言い切れないけど、多くの職業傭兵や賞金稼ぎが探し回っているはずよ。当然よね。賞金金額が途方も無いぐらい掛かっているもの。それに、セフィーリアからも幾つかの犬を放っているわ。ギルドにも契約の話が来ているみたい」

真剣な眼差し。

そこには、真実のみを伝えて下手な期待感を感じさせないよう配慮が見られる。

命を掛けた戦いにおいて、間違った情報に安堵したときほど危険なときはない。

「これから、とても辛い道程になるでしょう。もしかしたら進み行く先に終わりはないのかもしれない。このまま、貴方はこの子とともに逃げ回る日々を続けなければならぬ。でも、いつまでも貴方一人で護りきれぬものじゃない……」

厳しいが、キリア自身もその事は考えていた。

この人が、いくら無罪を訴え続けても王国はそれを認めないだろう。

だからと言って、エディーネを守り抜くにも限界がある。

「しかし、なぜ王国は彼女の命をそこまで狙う？ 不敬罪とはいえ、王国から離れて王女という地位も奪い取っておいて」

もはや、王国にとってなんの脅威にも感じないはずのエディ―ネをさらに刺客まで送り込む理由が分からなかった。

「なにか、知ってはならない事を知ってしまったから……」

深い沈黙が、室内に広がった。

## 第二章 二つの真実      もう一つの真実

その夜は、一年ぶりに寝台の上で過ごす事となった。

王宮の寝台に比べれば、質は悪いがそれでも固いレンガ造りの床や草むらに雑魚寝するよりは遙かにいい。

今まで、廃墟に身を潜めて、草木が風に揺れる音を鳴らす度に剣を握り身構えていた。

常に緊張感に満ちた夜に安息はなかった。

キリアと出会って、少しは眠れる夜を迎えたこともあった。

しかし、やはりどこから現れるか分からない相手におびえていたのも事実。

それは今も変わりはないが、体を温める敷布と久しぶりの満腹感が無条件の安心感をエディーネに与えている。

ゆっくりと瞼が重くなり始めた。

もう、しばらくもすれば眠りに落ちるだろう。

そんな時だった。

隣の部屋の扉が開く音が不意に耳に入る。

……キリア殿の部屋？

その足音は、ゆっくりと階段に向かい、木の軋む音を残して一階へと消え去った。

静かな時がゆっくりと流れる。

思えば、キリアと出会ってしばらく経つが、一国から命を狙われているエディーネを無償で、命を賭けてくれる風変わりな彼の事をあまり知らない。

もちろん、キリアが傭兵組合ギルドの中でも、ずば抜けた戦士だということは今までの戦いで十分に理解している。

前に、一度だけキリアに過去を聞こうとしたことがあった。

「キリア殿も、私と一緒にで自国から追われている」

寝台から飛び起きたエディーネは、寝着の上にローブを羽織、足音の後を追った。

## 第二章 二つの真実      もう一つの真実

苦悩に歪む表情のキリアが、エディーネには見えた。

大広間は、昼間の活気は消え去りただ静けさが支配している。

広間の奥に、机を挟んでキリアとリリアが何か話をしているようだ。

「やはり、レガリオン王国は……」

壁に阻まれて、向こう側からはこちらの姿が確認できないようで二人は話を続けた。

「それはそうよ。何しろ今の宰相は、実権こそ持っているけど所詮は補佐に留まっていた一族の出身。政治の駆け引きがまるで駄目だわ。国王も若いせいかな、宰相に頼りつきりみたい」

幾度も零れ落ちるため息は、呆れた感情を含んでいる。

「だからこそ、今の宰相には貴方の存在が脅威以外の何でもないのよ」

そこには、哀れみをも感じる口調だった。

「それで、ここ最近ラティーカ家から送られてくる刺客の数が増えているのか」

小声で話をする二人。もう少し近くでその話を聞こうとしたときだ

った。

「……エディーネさん、盗み聞きはいけないわよ」

視線を向けることもなく、リリアは静かな口調で諭す。

キリアは、頭を抱えながらエディーネに視線を向けた。

居た堪れなくなり、その場を後にしようとしたがリリアは予想外の言葉を発した。

「ちようどいいじゃない、エディーネさん同様にキリア君も一国から命を狙われているのよ。話が聞きたいんでしょ。ここの席が空いているわ」

気まずそうなエディーネを、キリアの横に座らせてリリアは話を続けた。

「キリア君はね、貴女ほどではないけど、それなりの家柄の生まれなの」

順を追って説明を始めるリリア。

「南方に存在するレガリオン王国……知っている？」

「文化芸術においては並ぶ国無し、と言われるあの？」

金細工や宝石加工など、大陸に流通する芸術品はレガリオンを通じて世界に流れる。

と言われるほどに高い水準の細工師を抱える文化レベルの非常に高い国だ。

事実、セフィーリアで売られる金銀細工のほとんどがレガリオンのものだろう。

「そう。キリア君は……いえ、ディオンは代々その国の宰相を務めてきた家系なの」

目を見開いて驚くエディーネ。

その表情を苦笑混じりに見つめる。

## 第二章 二つの真実      もう一つの真実

「もう、十年以上も前の話さ。それに、俺には兄がいたから……」

どの国でも、家柄を継ぐのは長兄と決まっている。

当然、その地位も長子である兄が継ぐこととなる。

しかし、エディーネには一つ気になる言葉があった。

「……いたから？」

その言葉は、人を過去形で表してしまう。

「十年以上も前に死んでいるんだ」

そこには、悲しみも嘆きも感じられない。

「キリア君、違うでしょ。死んだんじゃない、殺されたのよ」

キリアの表情が、僅かに強張る。

「いい、真実は受け止めなければならないの。エディーネさん、キリア君はね十年も前から今の貴女と同じような生活をしているのよ。たった一人でレガリオンから命を狙われながら生きてきたのよ。ギルドの戦士になることも対抗手段の一つとして」

十年以上も前ということは、キリアは十代も終わりに差し掛かった

頃。

たしかに、一人の少年が一国を敵に回して生き残るには確固たる技術が必要となる。

手っ取り早く、剣術を学ぶには傭兵になることが一番だろう。

「元々、ディオソ家は宰相という地位とは別に武官としても名を馳せていたの。あの巨大な剣もディオソ家に伝わるものよ」

一度でも、あの剣を手に取り戦場を駆ける姿を見たものは、味方ならばその頼もしさに心踊り、敵ならばその禍々しさに恐怖するだろう。

「でも、なぜキリア殿はレガリオン王国から命を狙われるのです？」

苦い表情で口籠るキリアに変わり、リリアが話を始める。

「レガリオンの政治革命って……知っている？」

昔、王宮で教わったことがある。

レガリオン王国の宰相が汚職に走り、利益を独占した事に奮起した一部の重臣が厳しく糾弾した事件だ。

## 第二章 二つの真実 もう一つの真実

当時の宰相は、一族ともども捕まり処刑されたと聞く。

確か、そのときの宰相の名前はソシル……ディオーン。

「そう、あの時の汚職の汚名を着せられて処刑されたのは俺の父だ。父は、国民のためにあらゆる改革を断行した。税金の減額や、貿易行路の整備。数え上げればきりが無い。しかし、そんな父の改革を快く思わない一部の反対派が領収書を偽造し、あるう事が一国の宰相を排斥したんだ」

キリアの瞳には赤々と燃え上がるような怒りの炎が灯る。

「すまない」

燃え上がる感情を抑えるように、少し呼吸を落ち着けて話を続ける。

「父に横領など出来るはずもない。私財を投げ打つてでも、国民のために改革を進めていく人だったから」

思い起こせば、そのために幼い頃は食事も切り詰めた儉約の生活を送っていた。

贅沢など経験したこともなく、服は全て五つ上の兄のお下がりばかり着ていた。

「キリア殿は、今でもレガリオンに対して復讐したいと願っている

のですか？」

不安そうにエディーネが訊ねる。

キリアは静かに首を振った。

「もう、十年以上も前の話だ。今は、国王も変わり王国の財政も傾き始めている。王国が手を出さない限り、俺は傭兵として生きていく」

そこには、過去との決別を誓った精悍な男の顔があった。

「それに、俺には貴女との契約がある……もう、俺と同じ思いは誰にもさせない」

「……」

思わず、その表情に見とれる。顔が熱く鼓動が高鳴る。

胸が締め付けられる思い。

キリアの顔が直視できない自分に気付く。

そんなエディーネをよそに、キリアは突然に席を立った。

「古い話をしたせいか、気分が高鳴って眠れそうもない。少し、夜風に当たってくる」

優しい笑顔を残して、二人に背を向けて屋外へと姿を消した。

## 第二章 二つの真実 もう一つの真実

「……あんなこと言っているけど、彼もずいぶんと苦しみながら生きてきたのよ」

外へと通じる扉を、頬杖をつきながらリリアは見つめる。

「リリアさんは、キリア殿のこと詳しいですね」

「うん？」

「私は、キリア殿と出会ってから二週間と経っていませんが、キリア殿のことをまったく理解していませんでした」

うつむいて、呟くような小さな声だった。

「それはそうよ！ 彼がまだ逃げ回っているときからの付き合いですもの。今でこそ、狙われる機会は減ってきているけど、当時は凄かったわよ」

目をゆっくりと睨り、懐かしい事を思い出すようにしんみりとした口調で話し始める。

「高額の賞金が懸けられていたから、誰もが彼を探していたわ。職業的殺戮者や賞金稼ぎ、各国の警備隊。誰も信じられなくなっていたみたい。ある日の朝、私がいつものように宿の前を掃除しようとして外に出たら血だらけの彼が倒れていたのよ」

激しい戦いの末に、酷く憔悴しきつたのだろう。

巨剣をしっかりと握り締めて倒れていたのだ。

「危険な状態だった彼を介抱して、当時この宿を訪れていた古い友人に彼を託したの。その友人はギルドの中でも屈指の戦士だったから。それに、幾ら剣の腕前に自信があっても、十七、八の少年。生き残るためにそれが最善だと思ったわ」

それから、過去にレガリオン王国からキリアを暗殺するような契約を幾度か持ちかけられたこと。

実際に、ギルドの戦士同士で剣を交わしていたこと。

色々トリリアは教えてくれた。

「彼の親族は、政治革命のときに彼を残して全員が処刑されたみたい。彼だけが、家族と仲間たちの協力で何とか逃げのびたみたいだけ」

炎に包まれた館から、キリアを逃すために母と兄それに姉が身を挺したという。

話を続けながら、席を立ち奥の調理場へ向う。

「彼は貴女が、自分と同じ運命になって欲しくないのでしょうか」

差し出された紅茶の心地よい香りが辺りに広がった。

「さあ、それを呑んでもう眠りなさい。キリア君は間違いなく優秀

な戦士だし、貴女の気持ちが一番理解してくれるはずだわ」

空を旅する真っ白な雲の流れが、今日はやけに速く感じる。

まだ、早朝のために空気は澄み、昇り始めたばかりの光は山の頂上付近で微睡している。

少し薄暗い空の下、二人は静かに宿を後にした。

通りに人影は少ない。

今なら、キリアとエディーネが村を出て、どちらの方角に進んだのかを知る者は少なくてすむ。

たったの一日だったが、夜を過ごした『話の集い場』が徐々に遠ざかる。

半刻ほど街道を進むと、クスール村の端が見えてきた。

このまま進むと、間もなくクスール村を出る。

「私に黙ってこのまま行く気がい？」

村の境にある、ちいさな木製の門の前に立つ人影は半ば呆れた口調だった。

「リリア！」

「リリアさん」

驚きの表情を見せる二人をよそに、リリアは二人に近づく。

「もし、次に行く当てがないのならルーゼルにある天啓主義教会修道院のアルチナを訪ねてみるといいわ。必ず力になってくれる」

リリアは、微笑みながら言う。

「ありがとうございます」

柔らかい微笑みを浮かべながらエディーネは言った。

### 第三章 黒い使徒 もう一つの顔

「美しい月ですね……」

グラスを傾けて赤いワイン越しに、夜空に輝く月を眺めて呟く男。

紅に染まる月は、グラスが揺れるたびにその姿が霞む。

夜も深まる頃、王宮一階のテラスに出て、愛飲の赤ワインを片手に心地よい風に吹かれることが男の至上の喜びだった。

口に含み、鼻に抜ける濃厚な葡萄の香りを楽しむ。

裾の長い黒く染め上げられた下地には紫のラインが二つ入っていた服。

それは、上位に位置する重臣にのみ着用を許された誉れ高き文官服。

ホーキン公爵レナード・ロゼは、今年で五十歳になる。

しかし、黒々とした艶やかな髪はきれいに整えられ、その美しい容姿には一切の衰えを感じさせない。

長身瘦躯の体つきは、詩人か学士のような印象を受ける。

セフィーリア王国でも数多の重役に就き、現在国王が体調不良により公務を果たせずにいるなか、その卓越した政治手腕をもって王国が乱れることを防ぎ、見事に統率していた。

あまりの手際の良さに、一部の貴族は『ホーキン卿はセフィーリアの王にでもなられたか』と妬みに近い感情を抱いている。

しかし、ホーキン卿はその都度に、オルゴールの音色のように同じ言葉を繰り返した。

……私は、国王陛下にお仕えする臣下に過ぎません。

今は、不幸にも陛下の体調が優れませんが故に、恐れ多くも国政の重要な決定事項を決断させて頂きます。

思い起こせば、ここしばらく夜風に吹かれる心地よさを忘れていた。

思わず、含み笑いを浮かべてワインを口に運ぼうとしたときだった。

「お時間よろしいですか？」

背中越しに聞こえたのは、まだ若い青年の声だった。

### 第三章 黒い使徒 もう一つの顔

表情が引き締まる。

ホーキン卿の周りには、護衛のものは誰もいない。

王国の重臣であるホーキン卿に、誰も挟まずに面会を求める青年。

本来なら、立ちどころに王宮内を警備する守衛たちに取り押さえられるだろう。

ところが、この状況にあつてホーキン卿は誰かを呼び寄せる素振りを見せない。

「クローツ修道士ですね。このような時間に何か？」

至福の時を邪魔されて、少し不機嫌な表情になるホーキン卿だったが、さすがにその気持ちを口調には出さない。

ゆっくりと振り返ると、そこには白い修道服に身を包む、背の高い青年が微笑みながら立っていた。

金色の髪の毛は、頬を撫でる優しい風に揺られている。

「こちらをお持ちいたしました」

爽やかな表情の青年は、手に持った茶色の封筒を手渡して恭しく頭を下げた。

受け取った封筒から、一枚の紙面を優雅な手つきで抜き取る。

「あの方々は事を急ぎ過ぎますね」

思わず、苦笑いが浮かぶ。

文面を目で辿りながら、ホーキン卿はおもむろに口を開いた。

「時期が早すぎます。この内容どおりに行くと、教会の分裂を生んでしまう。それにまだ、法王聖下は幼いのです。大陸中の約一億の信徒たちを導くにはしばらくの時間が必要」

珍しく、眉間にシワを寄せて思案に暮れる。

「仕方ありません。私自身が、法王庁に出向くよりありません」

一通り、文面に目を通すと小さく折りたたみ、マッチで火を点ける。燃え上がる紙片が、まるで蝶のように舞い上がりゆらゆらと地面に落ちた。

「私はしばらく、王都を離れます。例の事は任せましたよ」

「かしこまりました。わが主、レナード・ロゼ首席枢機卿猊下」

そこには、先ほどとは爽やかさは消え去り、悪意に満ちた笑みが張り付いていた。

「肅清使の準備は、肅々と進めて参ります」

ホーキンは、頭を下げる青年神官を一瞥もせず、王宮内に姿を消した。

### 第三章 黒い使徒 東の間の安らぎの中で

とても清々しく気持ちの良い日。

静かに流れる雲、白い鳥たちが天高く舞い上がる。

どこまでも広がる青い絨毯は、白波を立てながら地平の彼方まで続いている。

フォンブルグ公国の南に広がるフォルーガ海は果てしなく大きい。

それは、天啓教典に登場する海神フォルーガンの名を冠するに相応しく、いまだにフォルーガ海の終着の地を見た者がいないほどに。

そんな壮大な海の上、純白の帆は潮の香りを孕んだ風を飲み込みながら、壮麗で巨大な帆船を前へと走らせる。

交易船『コウル・シエラ・フォルーガ』

フォンブルグ標準語で『フォルーガ海の旅人』という意味で、三本の壮麗な帆柱、長さ三百メートルを誇る大きな船体。

フォルーガ海を運行する船の中でも比較的大型の輸送船だった。

その輸送船の甲板の上に人影がある。

風に遊ばれる黄金色の長い髪は、まるで柔らかな絹のように艶やかに舞い踊る。



### 第三章 黒い使徒 東の間の安らぎの中で

「エディーネは、海を見るのが初めてなのか？」

エディーネが振り返ると、眩しい太陽の光の中に佇む青年が目に入った。

「キリア殿、海というものがこれほどに雄大で美しいものだと知りませんでした」

恋する少女のように、頬を紅潮させて熱弁する。

「世界には四つの海があると聞きますが、他の海もこのように美しいのでしょうか？」

目を輝かせ、嬉々とした表情を浮かべる。

そこには、王国に無実の罪を着せられ厳しい逃亡生活を送る王女の苦悩は見えない。

つかの間に流れる平穏の時。

それは、長く続かないことは十分に理解している。

だからこそ、この限られた時間……次にいつ訪れるとも知れない時間を大切にしたいのだ。

「それぞれが、いろいろな表情を持っている。北は氷塊が幾つも浮

かぶ危険な海。西と東は荒れ狂う波が印象的だった」

腕組みをしながら、昔を思い出すようにしみじみと言った。

「そうなのですか」

意外な答えに驚きながらも、今は目の前に広がる絵画のような光景を楽しんでいる。

そもそも、この二人がフォルーガ海の真ん中を航行する輸送船に乗ることになったのは二日前までさかのぼる。

連日続いた大雨のために、深い霧が立ち込めるカーズ埠頭で足止めを受けていた時だった。

元々、カーズ埠頭周辺は霧が発生しやすい地域なのだが、これほど濃厚な霧の中では小型の船舶で沖の出ることは自殺行為に等しかった。

それだけでなく、交易ルートの終点に位置するルーゼル港はカーズ埠頭からどれほど急ぐとも四日はかかる。

### 第三章 黒い使徒 東の間の安らぎの中で

「西のルーゼル港までだって！ そんな遠くまで行きたいのなら、大型の商船にあたってくれ」

交渉を持ちかける船長は、皆一応にこう答える。

だからといって、陸路で王都ルーゼルを目指すと入り組んだ道と長い砂漠越えが何度も続き、最低でも二週間はかかるだろう。

途方に暮れるエディーネ。

徐々に空は曇りだし、あと半刻も過ぎればまた雨が降り出すだろう。

空を仰いで、思わずため息が漏れた。

元々カーズ埠頭は、王都ルーゼルへと続く交易海路の拠点のひとつに過ぎず、船を係留させて貨物を積み込むため乗員は貨物の受け渡し以外にカーズ埠頭に降り立つことはない。

そのため、必要最低限の施設しか配置されず、宿泊できる場所などあるうはずもない。

見回す限り、木製の倉庫が何棟も立ち並ぶ閑散とした光景だった。

太陽が傾き、徐々に辺りが暗くなり始めた頃。

少し離れた場所で、同じく船を探していたキリアが戻ってきた。

「見つかりましたか？」

不安な気持ちで問いかけるエディーネに、微笑みながら答えた。

「ああ。向こうに停泊している大型の輸送船がルーゼル港に向かう途中だから乗せてくれるそうだ」

### 第三章 黒い使徒 変わらない大きな手

旅の道程が海上に変わって二日目。

順調に航行できれば、後二日もすれば王都ルーゼルに着くだろう。

この日の月は、おぼろげな光に包まれていた。

相変わらずの穏やかな風の中で、コウル・シエラ・フォルーガはその名に相応しく黙々と白波を掻き分けて進んでいる。

静寂が支配する海の上、船を中心に海も空も暗闇に沈んでいる。

まるで、全てを飲み込もうとする異世界の扉を開いてしまったような暗黒が広がる。

思わず、背筋に冷たいものが走る。

見つめていると、そのまま心だけを奪い去られそうになる。

「あんまり、夜の海を見つめているとフォルーガンに連れて行かれるらしいぞ」

船員の言葉が脳裏に浮かぶ。

身震いをしながら、船室へ戻ろうとした時だった。

微かに波打つ海面。

それは、目を凝らして見なければ分からないほどに。

徐々に、月が雲に包まれ辺りが常闇に飲まれて行く中、エディーネはその正体をつかめないでいた。

「なに？」

身を乗り出して、それを確認しようとした時だった。

風を切り裂くような、独特の音が聞こえた。

銀色に輝く何か、エディーネに向かってくる。

それをかわせたのは、一重に逃亡生活で研ぎ澄まされた反射神経が成せるものだろう。

バランスを崩し、甲板に倒れこむ。

### 第三章 黒い使徒 変わらない大きな手

慌てて起き上がり、視線を戻すとそこには三人の人影が立っていた。三人とも、黒い衣を身に纏い、眼の部分に穴の開いた真っ白の仮面を装着している。

そして、手には小剣が握られていた。

音も無く、エディーネを取り囲む三人の動きには無駄がない。

それとは対照的に、奇妙な違和感を覚える。

呼吸を整え、剣を構えながらその違和感を探る。

そして、その違和感にようやく気付くことができた。

そう、この三人から何も感じないのだ。

今まで、数え切れないほどの刺客と相対してきた。

様々な手段を用いる彼らだったが、共通していた事が一つだけある。

それは、明確で例えようも無いほどに強烈な殺意だ。

必ず殺すという、強固な決意が体中から満ちていた。

しかし、三人からはそういった類のものは感じない。

まるで、事務的に剣を振るつような。

むろん、剣を手に持ち間合いをはかる以上、友好的な相手であろうはずが無い。

月明かりが消え去った船上。

音も無く襲い掛かる三つの白刃。

それは、常軌を逸するほどの正確なタイミングで繰り出される。

……隙がない

一人に気を取られていると、確実に残りの刃に命を取られる。

眼で見て、攻撃をかわしては間に合わない。

ほとんど、反射神経のみで相手の攻撃を受けていた。

「くっ……」

徐々に追い込まれていく。

### 第三章 黒い使徒 変わらない大きな手

かつて、これほど短時間のうちに息を切らした覚えはない。

額には大粒の汗が光る。

このままでは、体力の限界を迎えるのも時間の問題だ。

否応無しに、険しい表情になる。

何度か、相手の攻撃を受け止めた時だった。

「?!」

思わず舌打ちが漏れる。

幾度も、エディーネの命を救ってきた細剣がついにその刀身に限界を超えたのだ。

剣先が、暗闇の中を舞う。

これまでに無いほどの窮地を迎えた。

振りかぶったその小剣の中に、絶対的な死が見える。

不思議と、眼を逸らすことは出来なかった。

どこか、安堵にも似た奇妙な感情が自分の中に存在することに驚く。

ようやく、この先の見えない逃亡生活が終わりを告げようとしている。

もう、誰かに狙われながら過ごす、悪夢のような生活を終わらせられる。

目の前に迫る剣先を見つめながら、肩の力が抜けそうになったときだった。

「エディーネ！」

遠くに聞こえる力強い声。

見ず知らずの……薄汚れた旅装を纏い、何一つ恩を返すことの出来ない私に、命を賭けてまで付き添ってくれた。

酔狂にも、大国に狙われた非力な私に、惜しみなく助力してくれた存在。

そう……。

「キリア！」

心の底から、絞り出したような叫び。

### 第三章 黒い使徒 変わらない大きな手

一人で逃げていた時から比べて、どれほど心強く思えたか。

今、目の前に立つ、大きな背中に幾度助けられたことが。

「言ったはずだ。俺は貴女の剣になると。絶対に護ってみせる」

大剣が空を切る。

突然現れた伏兵に、三人の判断は早かった。

迷うことなく、底冷えするような暗い海へと飛び込んだのだ。

「逃げられたか」

引き際をわきまえている。

相当の手練だろう。

振り返ると、力無く床に座り込むエディーネが視界に入る。

「こ……腰が抜けてしまいました」

弱々しい笑みを浮かべる。

「俺は、たとえ誰が相手でも、誰を敵に回してでも君を護るとあの教会の前で誓った。だから、君も諦めるな。生き抜くんだけだ。どれだ

け醜く足掻いてでも」

差し出されたその手は、あの教会の前で握り締めた時と変わらない大きなものだった。

「……はい」

頬を伝う一筋の涙。

一瞬でも、生きることを諦めた自分の心を恥じながら、もう一度その手を握りしめた。

### 第三章 黒い使徒 枢機卿議會

世界中に、約一億人の信者がいるとされる天啓主義教会。

『唯一絶対なる教えの下、全ての人々は神の御名を唱えよ。されば、尊き理想郷に招かれるだろう』

聖典は、この一節から始まる。

いつの時代に発祥したのかはわからない。

しかし、人々の記憶……いや、もっと深い意識の中にこの一節は刷り込まれていた。

ここは、全世界に広がる天啓主義教会を統べる法王庁。

完全なる左右対称で作られた大聖堂は世界で最も大きく洗練された、全てにおいて他の教会の追隨を許さぬ壮麗さを持ち合わせていた。

大聖堂サン・ロゼッタ。

聖典の記録者の名を冠した聖堂の奥。

誰もが立ち入る事を憚る聖域の部屋。

その一室で、静かな会議が開かれようとしていた。

「皆様、御揃いのようですね」

紅の聖職者服を身に纏う男が、大きな扉を開き広い会議室へと歩を進める。

室内には、大きなコの字型のテーブルが配置され、一番奥の椅子を除いて全ての席に座る人影がある。

ただ、静かにその男が席に着くのを待っている。

室内に響く靴音。

やがて、男は一番奥に用意された高価な皮製の椅子にゆっくりと腰を下ろした。

「さて、それでは始めると致しましょうか。分かっているとは思いますが、この場での発言に嘘偽りの無いようにお願いします」

皆、一様に無言で頷く。

「まず、各々方の進捗状況からお聞きしたいのですが……」

出席者をゆっくりと見回す。

### 第三章 黒い使徒 枢機卿議會

「私からでよろしいでしょうか？」

声の主は若い女性だった。

男同様に、紅の聖職者服を纏い、どこか神秘的な印象を受ける整った容姿。

白雪のように澄んだ肌に、大きな瞳。漆黒の髪は、首下で綺麗に切りそろえている。

「それでは、ジュリア・シャノン枢機卿。お願いします」

一度、頷くとゆっくりと言葉が紡がれる。

「私が管轄するフォンブルグ公国領内では、複数存在が確認されていた異端教のほとんどを摘発し終えました。近々、異端審問を執行いたします」

静かにだが、ざわめく室内。

「さすがですな。あのフォンブルグの異端者たちを着任わずか五年で制圧して見せるとは」

嫉妬にも似た色を含む言葉を発したのは老齡の男性だった。

薄くなり始めた、頭髮と口髭は白く変わり、でっぴりとした体格を

隠すためか大きな紅の聖職者服を愛用している。

「いえ、何をおっしゃいますサイモン枢機卿。それよりも、ご自身が統括されているレガリオンは、聞きしに勝る異端の巣窟だったようです。十年以上も異教徒狩りを続けておられるのに、今だにレガリオンを治められておりません」

痛烈な皮肉をおり混ぜながら嘲笑する。

あんな、小さな国一つにいつまで時間を費やしているのだと。

獰猛な獣のような唸り声を上げるサイモン枢機卿。

「それぐらいにしておきなさい。それに、サイモン枢機卿が成された政治革命。あれは見事なものでした。我々に非協力的だったかつての宰相を排斥し、より敬虔な信徒が国王の補佐と成りえたのですから」

「……失礼致しました」

ジュリアは、納得できない表情ではあったが引き下がる。

「もちろん、ジュリア枢機卿の功績はすばらしい。これからも、神の御名の下にその力を存分に振るってください」

男からの礼賛に、頬を赤く染めながら頷く。

### 第三章 黒い使徒 枢機卿議會

「さて、では次に……」

「ラーゲル公国は、前回の報告のまま継続中です」

答えるのはエリック・アンダーソン枢機卿。

細身で白髪が特徴的な老齡の聖職者。

「ガンゼルグ連邦国だが、大きく変化は無い」

横柄な口調で、簡潔に現状を報告するのはゴードン枢機卿。

「ふむ……なるほど」

報告を受けて、思索していると。

「時に、貴方様の御国はどのようなのですか。レナード枢機卿議長」

エリック枢機卿は、ギョロとした目で男を見つめる。

「話に聞きますと、貴方の国の国王は不幸にも毒殺未遂にあわれ身動きが取れず。そう上に、王女が反逆罪で逃亡中。……少しやり過ぎかと思えますよ。このまま事が進めば、我らの計画は大きく修正しなければならぬ」

それは、まるで諭すような口調だった。

「そこだ！ ワシもそれが聞きたい。あの国王を昏睡状態にしたのは分かる。元々、我ら教会にとつて不都合な考え方の持ち主だ。だが、次代の王がいなくなれば国は乱れるぞ。あの王女を、王に据えるという話だからこそ秘薬を貸し与えたというのに」

ゴードン枢機卿は、あからさまに不機嫌そうな表情で問いかける。

「皆様の言いたい事は深く理解いたします。確かに、エディーン女王を次期国王にという事は私も考えました。事実、私の一族の者を通して元老院にこの意見を提案させました。しかし、戴冠式の直前に、私はエディーン女王と接見する機会がありました」

深いため息をつき、苦々しい表情で言葉を続ける。

### 第三章 黒い使徒 枢機卿議會

「結論から申しませう。エディーネ女王も、ユーリ国王同様に王国の中枢に教会の勢力が及ぶ事を嫌っておられた。私は、幾度か説得を試みましたが全ては無駄に終わりました。せつかくユーリ国王に退席していただき新たな国王を選定したというのに……」

再度、ため息が漏れる。

「だが、これからどうするのだ？ セフィーリアにはもう王家の血統がいなくなる。そうなれば、新たな王を選定する事となるのではないか。まさか貴方が新たな王にでもなるおつもりか？」

エリック枢機卿の言葉を受けて、男は悩む素振りを見せながら答える。

「そうですね。もし仮に、私があこの国の王になったとしましょう。そうなれば、セフィーリア王国に対する計画はその時点で、ほぼ終了したといえましょう。しかし、代償が大きすぎます。それは、王となった私は他国を行き来する事が非常に難しくなる。全体的に見れば大きく計画は遅れる事となるでしょう。それに、我らが目指すものはそのような小さき事ではありません」

世界にその名が知られた大国の玉座を小さき事と言い捨てる。

「ご心配は無用です。王家の血を受け継ぐのはあのお二人だけという訳ではございません」

そう言って、レナード・ロゼ・ホーキングは怪しく笑った。

### 第三章 黒い使徒 幼き法王

「私共の現状については、今お話した通りです」

畏まりながら、レナード・ロゼ・ホーキンは言葉を閉じた。

「うんつ。わっ……わかったよ」

頼りないその声の主は、オドオドした口調で答えた。

真っ白な聖職者服に紺の肩掛けを纏い、頭上には金で縁取られた白いミトラが荘厳に君臨していた。

そう、謁見の間にて神の代理者の椅子に腰を下ろし、二人の特別枢機卿を左右に従える尊き存在。

大聖堂サン・ロゼッタの大司教にして天啓主義教会第264代法王  
ロレン・ソアラだった。

数千年の永きに渡り、人々の信仰を集める全ての教会の長を務めるのは、まだ十二歳の少年だった。

「あの……その……」

どう答えて言いか悩むロレンの言葉を遮るよう左に座る人物が口を開いた。

「現状は分かりましたレナード枢機卿」

声の主は、ヴィクトリア・ルチル・ゴルトシュミットだった。

鮮やかな金色の髪は背中に流れ、青みを帯びた緑の瞳は静かにレナードを見つめている。

艶麗な容姿は、その神秘性に拍車をかけている。

若くして、法王に次ぐ高位聖職者である特別枢機卿に任じられ、法王庁の外交を取り仕切る外務長官を務める。

また、大陸でも有数の穀物庫であるゴルトシュミット大平原の若き領主としても有名だった。

### 第三章 黒い使徒 幼き法王

「法王聖下もお喜びになられています。聖下に代わり感謝します」  
優しい微笑みが印象的だった。

「……甘い」

その口調は、周囲の空気を一変させるのに十分すぎるほどの威厳と威圧があった。

「兄上？」

少し苦い表情で、ヴィクトリアは声の主に視線を送る。

そこには、眉間にシワを寄せ険しい表情の男がいる。

ベルゼー・ケント・ボルフィードは、明らかに苛立っていた。

ヴィクトリアと同じく、特別枢機卿の地位に就き、法王庁の内政と軍事を取り仕切る内務長官を務める男は苦々しい表情で口を開いた。

「レナード枢機卿、いつまで聖下を御待たせる気なのだ？」

まるで、断罪するような強い口調。

「……」

ただ、頭を下げて言葉を受けるしかない。

「貴公に枢機卿議会の長を任せている意味。理解しているのだろうか」

「兄上、事はそう簡単に済むものではありません」

ヴィクトリアは、冷静な口調で会話に入る。

「ヴィクトリア、そんな事だからいつまで経っても先へは進まないだ。我ら教会の考えは、全てにおいて優先されなければならない。しかし、未だに教会の意思を受け入れない国が存在する。聖下は、各国の王たちよりも上位に立つべき方なのだ」

言葉を止めるとその険しい視線は、まだ幼い法王ロレンへと向かった。

「聖下！ ご命令頂ければ、我が法王庁騎士団を速やかに、聖下の意に反する国々に派遣いたします」

「法王庁騎士団は、異端の疑いのある場合と法王庁への侵略の危険性があるときのみ派遣が許されるものです。異端の有無は、外務長官たる私が決定する事」

激しくにらみ合う二人。

### 第三章 黒い使徒 幼き法王

「兄さま……姉さま」

二人に挟まれ、法王ロレンはオロオロするより無かった。

やがて、無意味ならみ合いを打ち切るようにベルゼーがレナードに視線を向ける。

「とにかくだ。貴公がすべき事は一つ。枢機卿たちを率いて一刻も早く、世界を教会の教えの下に統治するのだ」

それだけ言い終わると、颯爽とその場を後にした。

「兄上……」

大きな音を立てて閉まる扉に、冷たい視線を送りながら呟く。

「姉さま、どうしよう」

相変わらず、オドオドする法王。

「聖下は何も心配する必要は要りません」

それは、愛おしげな眼差しだった。

「レナード枢機卿、兄上の非礼の数々申し訳ない。ただ、兄上は教会や聖下の事を第一に考えての言葉。気分を害さないでくれ」

「勿体ないお言葉です」

深く、頭を下げてレナード・ロゼ・ホーキンは静かに謁見の間を後にした。

#### 第四章 庶子の王女 サン・フォーレスト修道院

「ここが、王都ルゼールですか」

エディーネは、感嘆のため息をついた。

レンガ造りで統一された町並みは、物静かな印象を受ける。

風に乗って聞こえてくるのは弦楽器の穏やかな演奏と祈りの言葉。

「今日は、教会の礼拝の日なのだろう。普段は、にぎやかで活気に満ちた町なんだ」

レンガを切り出して造られた街道を歩く二人。

見渡せば、幾つもの教会の建物が眼に入る。

「それにしても、以前にルゼールを訪れたときは、ここまで教会の影響を受けてはいなかったんだけどな」

キリアは、不思議そうな表情だった。

かつての王都ルゼールは、これほど教会色の強い町ではなく自由気ままな商人の町だった。

そうキリアの記憶には残っている。

しばらくレンガ道を歩いていくと、やがて周囲から建物が無くなり

はじめ、平原が広がる。

その先に、低い塀で囲まれた大きな石造りの建物が見えてきた。

それはとても単純な造りで、まるで要塞のように飾り気の無い質素で無骨なものだった。

敷地内には、本館の倍はあろうかという二つの高い塔が聳え立っている。

「ここが……」

大きな木製の門の前で、エディーネはその建物を見上げる。

壁面に施された彫刻は、ローレンス神殿の彫刻に勝るとも劣らずの見事なものだった。

「ここが、リリアさんが言っていた修道院」

天啓主義教会サン・フォーレスト修道院。

およそ、百人の修道士や修道女が天啓主義の戒律に従い共同生活しているフォンブルグ公国内では最大級の修道院だ。

## 第四章 庶子の王女 サン・フォーレスト修道院

「お話は聞いております」

重々しい木製の扉を開いたのは若い修道女だった。

ゆっくりとした足取りで、修道院内の回廊を進む三人。

ふっと、庭には目をやると幾人かの修道士たちが鍬を手に地面を耕している。

また、別のところでは大工道具片手に町中へと修道士たちが消えていく。

それは、まるでこれから作業場に向かう労働者のように見える。

エディーネは、不思議そうに訊ねた。

「教会の司祭は、教えを諭す事が仕事ではないのですか？」

セフィーリア王国内に存在した教会の司祭たちは、そのほとんどが礼拝堂の祭壇で、訪れた人々に聖典の一説を用いて教えを述べていた。

彼らにとっての労働とは、人々の心の迷いを教えによって救う事。

決して、額に汗しする事ではなかった。

「確かに教会の主たる目的は、その尊き教えを広く世界に伝えるところにあります。しかし、修道院は少し違います。我々は、より深く教えを追及し、皆が自身の内に厳しい戒律を持って共同で生活しています。天啓主義教会の教えの中に『労働から生まれる祈り』というものがあります。我々、サン・フォーレスト修道院はこの教えを一つの軸と考えて、日々の労働によって祈りを捧げているのです」

「君の国にも、修道院は在ったんじゃないのか？ 確か、ロシエル修道院だったか」

そういえば、王国の東に広がる地方都市アシムに修道院があったように思う。

「在りました。私も、時間をみて一度は訪問しようと思っていました」

その時、静かな回廊に響く靴音が突然止まった。

「この部屋でお待ちください。院長をお呼びいたします」

静かに扉を開くと、中は質素なソファアが置かれた普遍的な客間だった。

#### 第四章 庶子の王女 修道院長

「そういえば、不思議と修道院を訪問しようとする急な用件が入っていました」

思い出したようにエディーネは言う。

先ほどまで、エディーネは室内で院長が訪れるのを待つ間、ソファに腰を下ろし何やら思案に暮れていた。

「ロシエル修道院は、ホーキン卿が治める領地に存在していました。私も幾度かアシムを訪れた際には訪問しようと思っていたのですが」

「しかし、エディーネも当時は王女として動き回っていたのだろ。ならば、急な執務が入るのは仕方がないことではないのか？」

「ええ……でも、今思うと、何か私が修道院を訪れる事を避けようとしていたような気がします。まるで……」

言葉を遮るように扉が勢いよく開いた。

「私がこの修道院の責任者アルチナ・コンスターだ」

「……」

最初、その人が修道女だという事をエディーネとキリアは理解できなかった。

二人はしばらく唾然とした表情になる。

燃え上がるような真紅の瞳に、低く重厚な声。

エディーネが見上げなければなら程の長身に、紺色の修道服越しに分かるほど無駄の無い鍛えられた身体はキリアと並んでも見劣りしない。

威風堂々と言う言葉が、これほどに似合う人はそうはいないだろう。

「なんだ？」

ギロリとその瞳が光を放つ。

「いいえ何でもありません」

二人は反射的にそう答える。

逆らってはいけない。そう、心の中の何かが叫んでいる。

#### 第四章 庶子の王女 修道院長

「リリアからの手紙で大体の話は分かっている」

凄むでもないのに空気がピリピリと震えている。

その口から放たれる言葉、見据えるような視線、そのどれもが圧倒的な迫力を持つ。

場所は修道院の中の客室。

相對しているのはまだ若い修道院長……のはず。

しかし、気分は戦場の第一線に身を投じ、目の前の修道女はさながら軍隊の司令官だ。

「お前が、王女なのだな」

「はい」

思わず、背筋がピンと伸びる。

「早速、本題に入ろう。お前はとうしほしい」

今は逃亡の身とはいえ、仮にも一国のそれも中央に名立たる大国の王女に対してここまで横柄な態度をとる修道女はそうはいない。

「その……」

あまりにも、簡潔明瞭な質問に呆気にとられていると。

「匿って欲しいのか？ 人手が欲しいのか？ 逃亡を手助けして欲しいのか？」

次第に獣のような唸り声を上げだす。

そんな状況にさらに驚愕は増すばかり。

「しばらくの間、匿ってはもらえないか。その間に情報を得たい。彼女を狙う者の正体、それとセフィーリア王国の事も調べたい。構わないか」

キリアは淡々と交渉を始めている。

「……分かった。その代わりに、ここではこここの規範に従ってもらう。働かない者には一欠けらのパンも無い」

そう言うと、二人の修道服を手渡してアルチナは部屋を後にした。

「……」

あまりの事態に絶句していると。

「あの人は、おそらく元は傭兵なのだろう。同じにおいがした」

そんなエディーネを苦笑しながらキリアは答えた。

## 第四章 庶子の王女 見極め

徐々に、太陽が傾き始めた頃。

「おい王女！」

修道服を纏いながら、修道女たちに混じって広大な庭に干された無数の洗濯物を取り入れるエディーネに声をかける者。

修道院長アルチナ・コンスターは、おもむろにエディーネを呼ぶとズカズカと回廊を進む。

「アルチナ殿、どちらに行くのです？」

エディーネからの質問を無視しながら歩を進めると、やがて本館から少し離れたところにある小さな建物の中に姿を消した。

エディーネは無言で後に続く。

「……ここは」

建物内は、天井の高い殺風景なものだった。

壁には無数の刀剣が立て掛けられ、そのどれもが激しく消耗した形跡がある。

視線を下に向けると、床はなく踏みしめられて固まった土が剥きだしだった。

「……鍛錬所。皆はそう呼んでいる」

「……！」

そう言いながら、こちらを振り向いたアルチナの手には剣が握られている。

その剣は、キリアの剣に比べて一回りほど小さいものだった。

それでも、剣という区分に入るのか疑わしいほどに鈍重な造りをしている。

「私は自分で感じたものしか信じない。お前がどれほどの力の持ち主か確認させてもらおうぞ」

大の男でも扱う事に苦勞するだろう。ましてや、エディーネには持ち上げる事すら叶わないほどの巨剣を、軽々と片手で振るう。

「構えろ、王女！」

## 第四章 庶子の王女 見極め

エディーネは、これまで幾度も死線を潜り抜けてきた。

それは、生半可な剣の腕では決して生き残る事が出来ない過酷な道のり。

キリアと出会う前から、幾人もの刺客と相対し返り討ちにしてきた。

それは、襲いかかる死の誘いを、手に握り締めた剣で払いのけて前に進む悲しみの日々。

いつ失うとも知れない、生への異常とも言える執着こそが生き残る最後の一線となる。

(もう一度、生きて国王に……ユーリに会いたい)

この思いだけが、絶望に満ちた世界の中でエディーネが歩を進める唯一の希望だった。

この昼夜を問わずに繰り返される襲撃の連鎖の中を、剣を握り締め息を切らせて走り抜けてきたのだ。

だからこそ生まれるものがある。

それは、決して過信ではない。

繰り返される戦いの中で培った、自分の剣に対する絶対的な信頼。

しかし。

「こんなものなのか王女？」

険しい表情で問いかける。

対して、エディーネは疲弊しきつた表情で今にも掌から零れ落ちそうな剣を、歯を食い縛って握り締めていた。

あまりにも違いすぎる実力。

住む世界が決定的に違う。

流れ落ちる汗の雫と、整える事が不可能なほどに乱れた呼吸。

おそらくは、この鍛錬所に入って、まだ十分と経っていないだろう。

しかし、エディーネには何時間も戦い続けているような疲労が感じられる。

男を思わせるほどの力強い剣撃は、受けるたびに両の掌を痺れさせる。

かと思えば、エディーネよりも身軽な動きで翻弄する。

一方的な攻撃に、エディーネの体力を激しく奪う。

堪らず、エディーネの膝が崩れる。

## 第四章 庶子の王女 見極め

「……………本気を出せ」

赤い瞳が危険な光を放ち始める。

それは一歩間違えれば殺気とも受け取れるものだった。

「……………それとも死ぬか？」

ゆっくりと歩を進める。

その光景に、背に寒いものを感じた。

傲慢なほどに緩慢な動きで、徐々に近づいてくる。

やがて、目の前に迫るもの。

鈍い光を放つアルチナの剣が、高く掲げられた。

「もう一度、言ってやろう。……………本気を出せ」

一言、呟いた後……………獅子の咆哮の如き、裂帛の気合と共に剣は振り下ろされた。

鈍い光を放つ切っ先。

それは、エディーネの目の前で静止している。

「なるほど……お前の力は大体分かった」

納得したような口調。

その中には僅かな満足感が含まれている。

その手に握り締められた剣。

鋼色の刃には一筋の細い裂け目が走っていた。

激しく乱れる呼吸の中、一心不乱に斬り上げたエディーネの細剣がアルチナの巨剣を弾き返したのだ。

激しい力の衝突のため、エディーネの剣は真ん中で二つに折られていた。

先ほどまで、辺りを支配していた圧倒的な存在感が徐々に薄れていく。

思わず体中の力が吸い取られていくような虚脱感に襲われた。

エディーネは、力無く床に座り込む。

「今、お前の国で起こっている真実は、この程度の衝撃では済まないぞ」

見上げた先、そこには屈強なる戦士の如く威風堂々たるアルチナの姿がある。

「今まで、隠され続けてきた事実が動き出した」

ゴクリと喉が鳴る。

「知りたいのであれば……」

強い光を放つ赤い瞳から、目が離せない。

「王女、後で私の部屋に來い。何が起こっているのか教えてやる」

## 第四章 庶子の王女 もう一人の王女

その事実には、王国の重臣たちは激しく動揺する。

「その話を信じる根拠はあるのですか？」

「我々は、一度もアルゼン陛下からそのような話を聞いたことはありません」

戸惑いから、思わず声を荒げて問いただす元老議員。

元老議会は、まるで戦場のように怒号が飛び交った。

やがて、一人の男がゆっくりと口を開いた。

「それは当然です。この事実は徹底して内密にされて参りました。王国内でもこの事実を知る者はほとんどおりません。私としても、この事に関しては生涯口にしないはずでした」

男は、沈痛な面持ちで列席者を見渡した。

「しかし、今……このセフィーリア王国は、王家の血統が途絶えようとしています。国王陛下はご不幸にもあのような事件に巻き込まれ、王女は現在逃亡中。このままでは、王座の正統なる継承者が絶えてしまいかねません。我々に残された道などありません。隣国に蹂躪されるならば、母親の血筋が不確かであろうともアルゼン陛下の直系というこの真実に縋るよりありません」

その口調は断固として、異論を挟む余地の無いものだった。

## 第四章 庶子の王女 もう一人の王女

「しかし、その者……いえ、そのお方を我々も国民達も知りません。そのような事で、果たして国民からの支持を得られるかどうか。まして、そのお方が本当にアルゼン陛下の落胤だという事をどのように証明されるおつもりですか」

毅然とした口調で問う。

しかし、その口調とは裏腹に隠し切れない不安な思いが表情に滲み出る。

そして、それはこの場に立ち会う者、全てに言える事だった。

「ご安心ください。この事実を知る者は、少数ながらも王宮に存在します。その中の一人、エルミダに証言してもらいます。彼女は王宮での生活も長いことから貴族たちの信も深い。それに、元が商家の出である事から国民からも慕われております」

一同がざわめく。

かつて、もっとも国王から信頼を置かれていた侍女の証言とあれば疑う余地は無い。

「元老院の皆様、ご決断を」

しばらくの沈黙が議場を支配した。

「分かりました。この件に関して、我々元老院は貴殿にお任せする  
事とします」

「セロン議長閣下並びに元老議員の方々の賢明なご判断に感謝しま  
す」

深々と一礼する。

「後日、そのお方を元老議会にお連れ頂きたい。その上で、我々は  
精査の上で正式にそのお方に王位継承権を有する『ドワークス』の  
称号を承認いたしましょう。それで、そのお方の御名はなんと申さ  
れるのですか？ ホーキン卿」

一同の視線が男に注がれる。

「バーバラ……現在は、バーバラ・ローゼンと名乗りアシムのロシ  
エル修道院にて修道女として生活されております。しかし、本来の  
名はバーバラ・サラ・セフィール様。おそらく、その御姿を一目見  
れば彼女が王位の正統な継承者だと分かるでしょう」

## 第四章 庶子の王女 もう一人の王女

「それは……何かの間違いでは？」

言葉の静かさとは裏腹に、頭の中は激しく乱れていた。

それは、まさに青天の霹靂だったからだ。

「私の情報に間違いはない」

議論を挟む余地の無いほどに断言しきる。

厳しい視線に、思わず息を呑んだ。

「セフィーリア王国は、新たに王位継承権を有する少女を王宮に迎え入れる」

まるで、崩れ落ちるようじにその場に座り込んでしまう。

あまりにもありえない言葉だった。

それは、セフィーリア王国の根幹を揺るがす。

つまりは、王家の交代。

「そんな……信じられない」

茫然自失……。

体中が小刻みに震えるのを止める事ができない。

「エディーネ、落ち着くんだ。アルチナ、詳しく教えてくれないか」  
震える小さな肩を抱きしめながら、キリアは言葉を続けた。

「セフィーリア王国には、ユーリ国王陛下とエディーネ王女以外に継承権を有する者は存在しないはず。つまり、王家の血統以外の者に王冠を被らせるのか？ それでは国民が納得しないのではないのか」

現在、政務が出来ないとはいえ、国王が存命している。

その事実を無視して、新たに王族以外の人間を国王に推挙するなど前例が無い。

まして、そのような横暴が通るほどセフィーリア王国が混乱に陥っているとはとても思えない。

「それは違う」

静かな言葉だった。

「確かに、セフィーリア王国には王位継承権を有する者は国王と王女だけだった」

エディーネには、その言葉の意味を理解する事ができなかった。

「だけだった……？」

思わず、その言葉が漏れた。

その言葉は、その事がすでに過去の事実には過ぎないという事になる。

つまり………

「王女、お前には母が違う妹がいたのだ」

## 第五章 揺らぐ王国 混乱の序章

信じていた世界の崩壊。

それがこの僅かな期間のうちに幾度も押し寄せてきたのだ。

普通の人ならば、そのあまりの悲しみに心を壊してしまうだろう。

そう思うと、エディーネは耐え抜いたほうだ。

それでも限度がある。

事実、エディーネの心は酷く疲弊していた。

最愛の弟にして、絶対の忠誠を誓う国王に襲い掛かる異変。

それに伴い、心を殺して王位を受け入れたはずなのに、気がつけば反逆者として信じていた王国から追われる身となった悲しみ。

その上に……その上に、今まで存在すら知りもしなかった妹の存在。

心に溜まった思いが爆発しそうだった。

なぜ、ここまで追い込まれなければならないのか。

今まで抑えてきた、怒りにも似た悲しみが激流となってエディーネに襲いかかる。

もう、何を信じていいのか分からない。

全ての現実から目を逸らす事が出来ればどれほど楽になれるか。

修道院から用意された一室。

備え付けのベッドの中、エディーネは心を閉ざしていた。

幾度か、扉を叩く音が聞こえた。

おそらく、エディーネの事を心配したキリアが訪ねてきてくれたのだろう。

しかし、今は誰とも会う気になれない。

会う勇気がない。

会ってしまえば、全ての感情が堰を切つてように溢れ出してしまいかもしれない。

激しい葛藤の中、静かに時だけが流れていく。

## 第五章 揺らぐ王国 混乱の序章

「唯一絶対なる教えの下、全ての人々は神の御名を唱えよ。されば、尊き理想郷に招かれるだろう」

壮年の修道士が、聖典の一説を暗唱する。

「唯一絶対なる教えの下、全ての人々は神の御名を唱えよ。されば、尊き理想郷に招かれるだろう」

その場を集う全ての人がその言葉に続く。

毎朝開かれる祈りの時間。

サン・フォーレスト修道院の聖堂が静かな空気に満たされる。

一時間あまりの礼拝が終わり、修道士たちが自分の仕事場に進む中、一人の青年が呼び止められた。

「礼拝に出てくるとは良い心掛けだ」

修道院長アルチナは感心した様子で話しかける。

「お前は、教会の信者ではないだろう」

試すような口調で問いかける。

「世話になっている以上は規則に従うさ」

朗らかな表情でキリアは答えた。

「……時に、王女はどうしている？」

「しばらくは、そつとしておいた方がいいでしょう。この一年、あまりにも多くのショックを受けて弱っていた心に、あの事実は……」  
首を横に振りながらキリアは答えた。

今まで、存在すら知らなかった妹の存在。

その衝撃は想像を絶しただろう。

「だが、あまり悠長に構えてもいられないぞ」

険しい表情のアルチナ。

「何かあったのですか？」

「……いや」

珍しく、歯切れの悪い返答をする。

「………続きは私の部屋で」

そう言うと、二人は聖堂を後にした。

## 第五章 揺らぐ王国 混乱の序章

深い沈黙が部屋の中を支配していた。

「これは、リリアから届いた書状なのだが……」

内容を確認してキリアは言葉を失った。

「なぜ、このような事に？」

困惑の色を隠せない。

「これでは国として機能していない」

そこには、内政の混乱がまざまざと書き記してあった。

異常ともいえる税の上昇。

抑止力の無くなった貴族たちの領民に対する横暴。

それらに対して、なんら有効な対策を打つ事のできない王宮への不満。

数え上げたらきりが無い。

もはや、大陸にその名が轟く王国セフィーリアも砂上の楼閣と成り果てていた。

「どれほど、セフィーリアの国民たちが憤怒しているかが容易に想像できる。」

「このまま、何の手も打たずに放置しておけば最悪の事態に陥りかねない。」

「このままでは、セフィーリア王国は内乱を起こしてしまつぞ。」

## 第五章 揺らぐ王国 七貴族議会

薄く広がる雲の隙間から洩れる月明かりと、外郭沿いに掲げられた無数の篝火が微かに王都を照らし出す頃。

静まり返った宮殿の中、城の最深部の一室に集まる人影。

それは、他の者の目に付かないように密やかに行われていた。

皆、落ち着かない雰囲気で室内に用意された席に腰を下ろす。

やがて、この場に皆を招待した男が部屋を訪れた。

皆、一様に起立すると恭しく頭を下げた。

「皆様、お忙しい中お越しくださいましてありがとうございます」

男は、深々と頭を下げると静かに自らの席に腰を下ろした。

そして着席するように視線で促す。

「さて皆様……まずしばらくの間、議会に出席できなかつた事をお詫びします。では、早速本題に入りたいと思うのですが。この現状はどういう事なのですか？」

穏やかな表情とは裏腹に、レナード・ロゼ・ホーキンの目は笑ってはいない。

出席者たちを見渡した。

皆、一様に口を閉ざしている。

「まず、バートン卿……貴方には、貴族たちの統制をお願いしていただきます。この有様はどういうことなのですか」

あからさまに不満の色を滲ませる。

口調の穏やかさは反対に、苛立った視線が向けられた。

それもそのはず。

現在、王国を統べる者の不在といっても過言ではない。

それは、すなわち貴族たちを咎める者が居ない事を差す。

今まで、王宮の権威に恐れ大人しくしていた地方の下級貴族にとっては、またと無い好機だった。

ここぞとばかりに、位の低い貴族たちは民衆に権力を振りかざす。

その事は、以前から懸念されており、この事態を防ぐために貴族の統括を指示していたのだ。

しかし、現状は日に日にその横暴振りは増し、地方から順々に王国の雰囲気が悪くしている。

## 第五章 揺らぐ王国 七貴族議会

「それは……そのですね」

男の言葉を受け、バートン公爵は冷や汗を流しながら言葉を探している。

王国の貴族の中でも上席に位置し、多くの豪族を門下に従える大貴族バートン公爵は、六十を超える老齢で若い頃から七貴族議会に出席していた。

それは、ホーキン公爵が議会に出席する以前からである。

故か、ホーキン卿が議長職についてからもどこか軽く見るところがあった。

だが、それはすぐに見直されることとなる。

優れた政治手腕と統率力は驚愕に値し、あの元老院までも手玉に取っている。

自分との器の違いにもはや脱帽するより他になかった。

だからだろう。

今は十ほど年の離れた男の詰問に答える事が出来ない。

「……いいでしょう。バートン卿にはこれからお力添え願う事も

あります。その時には何卒ご協力のほどを」

言葉とは裏腹に、ホーキンの視線は冷たい。

「次にハミルトン卿」

突然、名を呼ばれ青い顔でホーキンを見るのはまだ若い青年だった。古くから王宮で財務を取り仕切る、由緒正しきハミルトン家の次期当主は政務についてまるで理解していなかった。

「な……何か？」

声が裏返っていた。

「なぜ、これほど国民から税をとる必要があるのです？」

突き刺さるような視線に、冷や汗を浮かべながら硬直する。

その様子を、呆れた表情で見ながらも一度出席者を見渡し言った。

「皆様、分かっておられますか？ 我々は、著しく国民からの信頼を欠いてしまった事を。地方では、決起した国民と領主軍が衝突したという話も聞いています。これが、王国全土に広がればどうなるか……」

熱弁を振るうホーキンに、冷や水を浴びせるような言葉が向けられた。

## 第五章 揺らぐ王国 七貴族議会

「国民が暴動を起こせば、近衛騎士団を出勤させればよいのでは？」

近衛騎士団総司令官を務めるアンダーソン公爵は、煩わしそうな表情で言った。

レナード・ロゼ・ホーキンは、その職務上から他の誰よりも忍耐強くあるように心がけていた。

それは、王国の内政や他国との外交といった政務から、自身が統括するホーキンというあまりにも多くの豪族を門下に従える大貴族の一族の長としての責務を全うするにあたり自身の感情に振り回されず客観的な視点から物事を判断するためである。

「くれぐれもそのような事が無いようにお願いします。アンダーソン卿には近衛騎士団の総司令官として多大なご活躍を期待しております。しかし、それはあくまで他国に対して。国民の暴動に近衛騎士団を出勤するような事は絶対にあってはなりません」

「なぜです？」

アンダーソン公爵は不思議そうな表情で問う。

しかし、それにはさすがにホーキン卿の自慢の忍耐力も限度を超えた。

「貴殿は、国民に近衛騎士団を差し向けるといふ事がどういふ事な

のか理解しているのか！ それは、すなわち王国が内乱状態だという事を他国に触れ回る事になるのだぞ」

普段温厚なホーキン卿の、あまりに厳しい剣幕に息を呑む。

静まり返る議場。

やがて、一人の老齢の出席者が重い口を開いた。

「ホーキン卿申し訳ない。卿が議会に出席できていない間、私が取り仕切らねばならなかったのだが……」

言葉の主は七貴族議会副議長モーガン・フォーロンだった。

七貴族議員の中で唯一、レナード・ロゼ・ホーキンが信頼している男である。

ホーキン公爵に次ぐ大貴族であるモーガン・フォーロンは、その高潔な人柄と優れた武功から先代の国王からも重宝されていた。

「いいえ……私も、取り乱してしまい申し訳ありません」

ホーキンがそうであるように、フォーロンも自身が抱える多くの門下の豪族たちを統制する義務がある。

それは生半可なことではない。

まして、高齢のフォーロンに何度も王宮を訪問させるのは無理な話なのだ。

「議会を再開いたします」

それから、現状の改善と今後の対策が話し合われた。

「では、今回我々が取りまとめたこの議案は、元老議会に審議して頂くよう申し入れておきます」

長く続いた会議が終わり、薄っすらと疲労の色が滲むホーキン卿は書類を片手に部屋を後にしようとした時だった。

「時に、ホーキン卿。以前に話しておられた王位継承の件はどうなされた？」

フォーロンが、声を抑えながら問いかけてきた。

「ええ、その件に関しては明後日、元老院の方々にご紹介する予定です」

## 第五章 揺らぐ王国 新たな王女

「ホーキン卿、この少女が？」

レナード・ロゼ・ホーキンに連れられて、王宮を訪れた一人の少女に全ての人々は息を呑んだ。

小柄なその少女は、修道服姿で顔を覆うほどの大きなフードを被り、どこかオドオドしているように辺りを見渡していた。

「そうです」

静かに頷く。

「そ………そうですか」

無理やりに笑顔を作りながら、元老院議長セロンは少女の前に歩み出た。

「さあ、バーバラ様。フードをお脱ぎください」

ホーキンに促され、小さな頭を包んでいたフードをゆっくりと脱いだ。

「……」

思わず息を呑む。

それは、その姿を目にした全ての者に共通した。

確かに、一目見れば少女がアルゼン陛下の御子だという事が分かる  
とホーキンは言った。

王宮としても、アルゼン陛下の傍系から国王を選定することは避け  
たかった。

それは、いかに中央に名だたる大国セファイリアと言えども、臣下  
籍に一度でも降りた者を玉座に就けては諸外国との外交に支障をき  
たすからだ。

## 第五章 揺らぐ王国 新たな王女

しかし、セロンをはじめとする元老議員達も素直に受け入れられた訳ではない。

いかに、陛下の御子としても。

陛下が、戯れに手をつけた素性も分からぬ村娘が産み落とした子。

直系といえども非嫡出子に過ぎない。

どのように国民に説明するのか。

そして、諸外国に国王を認めさせるか。

深夜に至るまで議論は続けられた。

だが、その思いはその姿を目にした瞬間に消し飛ぶ事となる。

「エディーネ……様……」

フードの奥から出てきたその顔。

あまりの驚きに言葉を失った。

黒々とした髪こそ違えども、そこには幼き日のエディーネの面影を感じざるをえない。

「そうです。この御顔はエディーネ様と瓜二つ。つまり王座の正統

なる継承者である何よりの証拠となりましょう」

ホーキンは、晴れやかな表情で元老議員たちを見渡した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4735p/>

---

TREASON PRINCESS

2012年1月8日00時53分発行